１

平成27年度

研究開発実施報告書

～第3年次～

北海道教育大学附属札幌小学校
外7校

平成 27 年度

研究開発実施報告書
（要約）

～第 3 年次～

北海道教育大学附属札幌小学校
外 7 校

1	北海道教育大学附属札幌小学校　外７校	25～28

平成２７年度研究開発学校実施報告書（要約）

Ⅰ　研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため，小学校に新教科を導入し，4 技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法，中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

Ⅱ　研究の概要

小学校第 1 学年から新教科「小学校英語科」を導入し，国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力の基礎と積極的な態度の育成を目指す。具体的には，

①　「小学校英語科」の情意面及び技能面での目標と評価の在り方

②　4 技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムや文法指導の在り方

③　小中の教師間交流，児童生徒間交流，カリキュラム連携の在り方

を研究する。

中学校では，外国語科の授業の一部を小学校英語や，高等学校との接続を目指した指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し，英語科における指導計画と指導方法の見直しを研究する。さらに，ICT 機器を利用しての個別学習，遠方の子どもたちとの英語を介しての協働学習や交流学習の在り方を研究するとともに，その成果をウェブ上でデータベース化し，その効果的な活用を図るための指導や評価の方法をあわせて開発する。

Ⅲ　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力は，小学校において新教科「小学校英語科」を導入するとともに，中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し，小・中学校の効果的な連携を図る中で，ICT 機器の活用や，仲間との協働学習を効果的に導入しながら，4 技能を総合的に育成することで向上する。

①　「小学校英語科」を新設し，小学校第 1 学年から英語を導入することで，言語や文化についての体験的な理解と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を重視しながら，第 3 学年以降は「読むこと」「書くこと」を含めた 4 技能を総合的に育むことにより，国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力の基礎を育成することができる。

②　小学校で培った英語によるコミュニケーション能力の基礎が中学校でも引き継がれるよう，中学校において外国語科の授業の一部に「スパイラルタイム」を設定し，指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成し，教師間交流，児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図ることで，生徒の英語学習への動機づけや目的意識が高まり，コミュニケーション能力が向上する。

③　国際社会において主体的に活躍するために求められる，異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度は，「学びのイノベーション」として ICT 機器を積極的に活用し，遠方に住む子どもや異文化をもつ子どもたちとの協働学習を通じて育まれる。また，学習成果をウェブ上にデータベース化する「わくわく！スノーマン・プロジェクト」は，子どもの文字への関心を引き出すとともに，「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲につながり，他者との協働学習による学びの広がりを実感させ，英語学習の動機づけと異文化理解を促す契機となり，主体的に

コミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながる。

（２）必要となる教育課程の特例

小学校：「小学校英語科」の新設 第１学年及び第２学年を週 0.5 時間，年間 17 時間設定する。 ・　各教科から時数をあてる。 第３学年から第６学年は週１時間，年間 35 時間設定する。 ・　第３学年及び第４学年は各教科，総合的な学習の時間から時数をあてる。 ・　第５学年及び第６学年は外国語活動の時間の時数をあてる。

Ⅳ　研究内容

（１）教育課程の内容

１　具体的な教育内容・方法

①　新教科「小学校英語科」を導入し，カリキュラム開発を行う

（ア）小学校新教科「小学校英語科」における目標と評価，カリキュラムの在り方についての研究

（イ）中学校「スパイラルタイム」における指導方法と指導内容の在り方についての研究

（ウ）小学校卒業時の CAN-DO リストの作成

②　「スノーマン・プロジェクト」を意識した授業づくり

（ア）課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり

（イ）自らの学びを確認し，他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発展教材（スノーマン）づくり

（ウ）時間や空間を超えて相手とつながることの楽しさを実感することによる主体的態度の育成

③　英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」

（ア）空間を超えて人とつながる環境（スカイプ，E-mail，インターネット）

（イ）時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境（スノーマン・プロジェクト）

（ウ）音と文字の関連を一人でも実感できる環境（どきどき！英語変換チャレンジ）

④　効果的な小中連携の在り方

（ア）効果的な小中の情報交換の在り方

（イ）教師間交流，児童生徒間交流の在り方

（ウ）効果的な小中接続のためのカリキュラムの在り方

２　研究成果の評価方法

①　測定方法

（ア）小学校卒業時における英検 Jr. GOLD グレードレベルの調査の実施

小学校卒業時に，「日本英語検定協会」主催の英検 Jr. GOLD グレードクラスの学力が身に付いているかどうか評価する。　（研究仮説①③の測定）

（イ）中学校英語学習初期の段階における文字習得状況調査

文字を取り扱わない小学校外国語活動で学んできた生徒と「書くこと」を取り入れた小学校英語科で学んできた生徒の文字習得状況の違いを，中学校入学後２ヶ月を経た段階での単語テストにより調査する。　（研究仮説①③の測定）

（ウ）児童生徒アンケートによる評価

「小学校英語科」「スパイラルタイム」の学習者の心理面への効果を，コミュニケーションへの意欲，

言語や文化への関心・意欲の点からアンケート調査する。（研究仮説①②③の測定）

（エ）中学校における発表力・表現力の習得状況調査

英語によるプレゼンテーション力の調査を通じて，発表姿勢や意欲，表現において，どのような力が付いているかを調査する。（研究仮説①②③の測定）

②　見取りの方法

（ア）振り返りカードによる評価

授業終了時には，児童生徒一人一人に対して「振り返りカード」に記入させる。これは授業や活動を通しての気付きを児童生徒自身が記入するものである。小学校１年から中学校３年生まで継続的に記録して，変化の様子や学習の深まりを検証する。（研究仮説①②の見取り）

（イ）アンケートによる評価

発達段階に応じて「英語への関心・意欲」についてのアンケートを行い，児童生徒の興味・関心のポイントを検証し，授業内容の改善に役立てる。（研究仮説①②③の見取り）

③　プロジェクトの評価

（ア）北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクトによる検討　（内部評価）

振り返りやアンケート，各種調査による検討を行い，授業の方向性や改善点を検討する。また，本学大学教員による児童・生徒のコミュニケーション能力の分析，教師による授業分析を行い，授業改善に生かしていく。

（イ）北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクト評価委員会による検討　（外部評価）

評価委員会（大学の専門家，北海道教育委員会指導主事，札幌市教育委員会指導主事で構成）を立ち上げ，本研究に対して評価していただき，プロジェクト全体の改善に生かす。

３　研究の内容等

小学校に第１学年から「小学校英語科」を新設する。第１学年及び第２学年は，言語のおもしろさやコミュニケーションを図る楽しさを感じる段階と位置付け，コミュニケーション能力の素地を養うことを目標とし，いわゆる「活動型」として実施する。第３学年以降は，「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を養うことを目標とし，いわゆる「教科型」として実施する。第３学年及び第４学年は，第１学年及び第２学年において学習したものも含めて，英語の音声や基本的な表現を身に付けていく段階として位置付ける。第５学年及び第６学年は，「コミュニケーションを図るために必要となる文構造の理解」を加えたコミュニケーション活動を通して，第４学年までに学んできた表現等を活用する段階として位置付ける。また，このときの達成目標も検討していく。特に，中学校学習指導要領にある「言語の使用場面」や「言語の働き」「語彙」で挙げられている具体的な例を中心に，コミュニケーションへの積極的な態度や言語や文化についての体験的な理解とあわせて，英語の語彙・表現を活用しながら「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を，長期的・段階的・螺旋的に養うことを目指す。

＜小学校英語科の目標＞

【第１学年及び第２学年】 英語を通じて，言語や文化について体感的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション	【第３学年及び第４学年】 英語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現を身に付けさせながら，聞くこと，話すこと，	【第５学年及び第６学年】 言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，身に付けた表現を活用させながら，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコ

能力の素地を養う。	読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。	ミュニケーション能力の基礎を養う。

①　第１学年及び第２学年（低学年）の内容

第１学年及び第２学年では，第３学年以降で設定している年間３５時間の半分弱である年間１７時間の授業時間を設定し，検証のために函館小学校の第１学年及び第２学年のみ，年間３５時間で実施している。内容としては主に，歌やゲームに重点を置いた活動を通して，アルファベットや，身近なもの・ことを表す英語の音声やリズムに慣れたり，表現するための技能を少しずつ身に付けていったりすることを目指している。したがって，身近なもの・ことを表す英語を繰り返し聞いたり話したりしながら意欲的に学ぶことができるような話題を単元として位置付け，生活経験や他教科における学習内容と関連を図った活動を様々に設定している。

１回の授業における新出単語は５～６語程度に抑え，年間 12 単元を通して 100 単語程度を学習していくようにして，児童の負担が過剰にならないよう配慮している。また，既に日本語化している単語や，日本語と英語で全く発音が異なるものを混在させ，児童の「わかる」「できそうだ」という思いを引き出すようにしている。例えば，２年生単元「いろいろな形」の学習では，triangle, circle といった児童にとって身近な単語と，oval, rectangle などの聞き慣れない単語を合わせて 10 語程度扱う。絵カードの形と音声を，簡単なゲーム活動の中で繰り返し聞いたり声に出させたりしていくことにより，音声と形のイメージをつなげ，発話につなげていくことをねらっている。

②　第３学年～第６学年（中・高学年）の内容

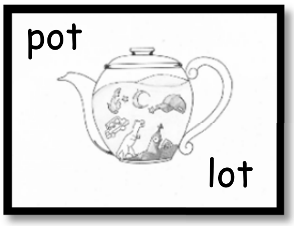
中・高学年においては，どの学年も年間３５時間で実施しており，週１時間のペースで授業を行っている。中学年では，友達や教師とのかかわりを一層重視したコミュニケーション活動に取り組み，低学年で触れてきた身近なもの・ことを表す英語も含めて，簡単な英語を使いながら，自分の好みや思いなどを聞いたり話したりすることができるようになることを目指している。また，アルファベットを識別したり，正しく書き写したりしながら，身近なもの・ことを表す英語を読んだり書き写したりすることができるようにしていく。したがって，中学年の内容は，身近なもの・ことを表す英語も含めて，簡単な英語について聞くことを重視しつつ，徐々に話す活動を取り入れ，さらにアルファベットの大文字・小文字や，十分に聞いたり話したりして児童自身に思い入れのある状態となっている身近なもの・ことを表す英語を読んだり書き写したりする活動で構成されている。

また，高学年の内容は，初歩的な英語を聞いて話し手の意向の大体を理解したり，簡単な英語を用いて自分の思いや考え，事実などを話したりすることができるようになることを目指すものとしている。また，これまでに学習してきた身近なもの・ことを表す英語や簡単な英語を声に出して読んだり，書き写したりしながら，文字を介したコミュニケーションを図ることもできるようにすることをねらっている。

③　小学校英語科における指導方法等の特徴

今年度は，昨年度充実が不十分であった点を補いながら指導方法等をさらに大枠として捉え直して実践を行った。それらの特徴を整理すると以下のようになる。

（ア）学習内容への興味・関心を高めるための工夫

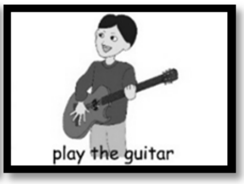


昨年度，成果として見出した手立てである「学習への一層の動機づけを図る活動の設定」「ゲーム性のある各種活動の設定」「場面を重視した言語運用」「学習への一層の動機づけを図る教材の用意」に加え，次のような点に注意しながら実践した。

Ａ　特に「読むこと・書くこと」への興味・関心を高めるためのウォームアップ

・　学習の中で活用が期待される単語を使いながら意味と音声と文字を結び付けていくための文字活動の

設定。(原則，音→ 音＋写真 → 音＋絵・写真＋文字の順に提示)

B　文字の提示の工夫

・　基本的に，話題にしているもの・ことを表す英語の音声と絵・写真等を提示し，それを経てから文字も提示する手順。

・　表示する絵を小さくし，文字を大きくすることで，意味内容を明確に文字で捉えることができるようにする試みも行っている。

C　英語を読んだり書いたりする必要感のある活動・単元の創出

・　１～２か月に１冊の割合での絵本の音読。(絵本を見ながら ALT や JTE の後に続いて読んでいく)

※　６年生単元「The lonely monster の友達をつくろう」において，オリジナル教材「The lonely monster」の読み聞かせ動画(文字のあるビデオ教材)を視聴し，その物語の続きを書く活動を設定しており，目的意識をもった書く活動につなげていくことができる。

(イ) コミュニケーションを支える文法事項と指導の在り方

釧路小学校では，今まで学習した単語をカード化し，学びの蓄積として掲示をしたり，児童が思い出したりするために活用している。その際，大まかにカードを品詞によって色分けしている。(名詞→青，形容詞→緑，動詞→赤など)

(ウ) 方略的能力を育成するための指導の工夫

函館小学校では，６年生単元「海外の人を日本食でおもてなし」において，日本食について説明する際，はっきりと話すことや，紹介するものの写真を提示し，説明に合わせて指をさしながら話すこと等，積極的にコミュニケーションを図る姿につながる効果的な話し方に着目する場を設けている。

また，札幌小学校では，６学年単元「行ってみたい外国は？」において，相手の話に相づちを打つ際にどのような言葉を使うと自然なコミュニケーションが成立するかということを考える学習を行っている。

(エ) コミュニケーション活動につながる必要感に応じた練習の機会の充実化

釧路小学校において，自分の課題をもち解決していくために，わからないところや不安なところを個人で学習できるように ICT の活用を試みた。iPad 用のアプリである“Quizlet”や“Key note”を活用したり個人でビデオ教材を見たりできるようにすることで，身に付けたい表現を繰り返し学習することができた。

また，学習形態の工夫も重要である。ペア学習，グループ学習など段階的に設定し，協力して学習していける過程を大切にした。また，内容も少しずつ変化させること，難易度を変えること，制約を加えることなど，楽しみながらかつ自己の課題解決に向けて繰り返し練習する機会の充実を図ることが大切である。

④　中学校「スパイラルタイム」における指導の内容等について

中学校では現行の教育課程の枠内で，外国語科の授業の一部を「スパイラルタイム」と設定し，小学校英語科と指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成し，実践を進めている。この「スパイラルタイム」では，通常の授業以上に意味内容を意識して，生徒が英語をツールとして使用することを目標としている。この時，生徒が小学校で学んだ内容を想起しながら，繰り返し学び直すことができるよう配慮して指導している。今年度までの指導方法等については，以下の通りである。

(ア) 小学校英語科のカリキュラムに基づき，学習内容の継続性を考慮しながら，オリエンテーションとしての活動を，中学校１年生の最初の６～８時間を使って行う。

(イ) 日常生活における意味中心のやりとりによるコミュニケーション活動や，コミュニケーション・ストラテジーの育成を狙った帯的な活動を，概ね 10 分以内と位置付けて実践する。

(ウ) 中学校卒業段階で，生徒が討論やディベートなどのより高度なコミュニケーション活動ができるようになるための，学習内容の広がりや，生徒の思考の深まり，表現の技能や質の高まりを目指した発展的な活動について，単元の終末に２～４時間程度の活動を位置付ける。

（エ）英語での自己紹介活動を小学生と交流したり，ビデオレターを作成したりするなど，他地域の中学生や異年齢集団，異文化をもつ人々と ICT 等も活用しながら音声を中心として交流する活動を，各学年で３～４時間取り入れる。

⑤　英語学習における「学びのイノベーション」の活用に関して

「わくわくスノーマン・プロジェクト」の実践においては，成果物の共有や，それらから自分たちの文化と比較をする機会を得ることができた。また，「遠隔地にいる友達との交流学習」では，インターネットとアプリを有効活用し，遠隔地の友達と直接コミュニケーションを図る機会を得ることができる。

（２）研究の経過

年　次	研究推進内容
＜第一年次＞	(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回） (2)　新教科「小学校英語科」の教育課程上の位置付けの検討 (3)　新教科「小学校英語科」の目標設定とカリキュラム作成 (4)　新教科「小学校英語科」評価の在り方の検討と CAN-DO リストの作成 (5)　新教科「小学校英語科」を導入後の中学校英語の目標と指導計画の見直し (6)　児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施 (7)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流・教師間交流の開始 (8)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」プレ運用開始 (9)　「どきどき！英語変換チャレンジ」実施 (10)　「スパイラルタイム」のカリキュラム開発 (11)　文字習得状況調査（中学１年・５月）の実施 (12)　評価委員会による評価の実施と次年度の方向性の検討 (13)　中学校・高等学校間の効果的な連携の在り方について検討
＜第二年次＞	(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回） (2)　小学校第１学年からの「小学校英語科」の実施 (3)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (4)　附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年４回） (5)　１年次研究成果の評価／中学校英語の目標再設定 (6)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」の本格実施 (7)　「どきどき！英語変換チャレンジ」の継続 (8)　「スパイラルタイム」の実践 (9)　文字習得状況調査（中学１年・５月）の実施 (10)　児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (11)　評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第三年次＞	(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回） (2)　CAN-DO リストによる評価の一部実施と見直し (3)　小学生が習得する基礎的文法事項の習得状況調査と効果の測定 (4)　中間評価（成果の確認と修正） (5)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (6)　附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年４回） (7)　接続を意識した小学校と中学校のカリキュラムの見直し (8)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」継続 (9)　「どきどき！英語変換チャレンジ」継続 (10)　「スパイラルタイム」の実践継続 (11)　文字習得状況調査（中学１年・５月）の実施 (12)　児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (13)　評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第四年次＞	(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回） (2)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (3)　附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年４回） (4)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」完成 (5)　研究の成果と効果の検証

（３）評価に関する取組

年　次	評価推進内容
＜第一年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　児童英検をもちいた英語の理解力診断（2 月　小学校 6 年生） (3)　学力テストをもちいた英語力の診断（8 月　中学校 1 年生） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4) の評価をもとにしたカリキュラムの検証
＜第二年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　児童英検をもちいた英語の理解力診断（2 月　小学校 5・6 年生） (3)　パフォーマンステストをもちいた英語力の診断（3 月　中学校 1・２年生） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4) の評価をもとにしたカリキュラムの検証
＜第三年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　児童英検をもちいた英語の理解力診断（2 月　小学校 5・6 年生） (3)　パフォーマンステストをもちいた英語力の診断（8 月　中学校） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4) の評価をもとにしたカリキュラムの検証
＜第四年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　児童英検をもちいた英語の理解力診断（2 月　小学校 5・6 年生） (3)　パフォーマンステストをもちいた英語力の診断（8 月　中学校） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4) の評価をもとにした 4 年間の成果の検証（11 月）

Ⅴ　研究開発の成果

（１）実施による効果

１　児童生徒への効果

①　英検 Jr.等を用いた英語の理解力診断結果から

2013 年度からこれまでの児童英検 GOLD・英検 Jr. GOLD の結果を使って，定点観測を行ったところ，次のようなことが分かった。

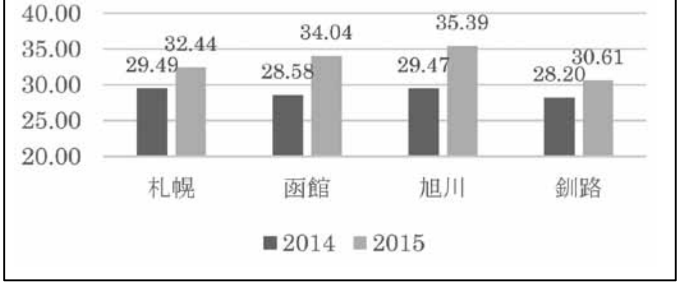
まずは，全体の英語力の伸びを推定するために，現中学 1 年生のこれまでの英検 Jr.（GOLD）の合計点の推移を分析したところ，2014 年 4 月（小 6）の 32.79 点から，2015 年 4 月（中 1）の 36.04 点へと伸びを見せており，小学校 6 年生の 1 年間において有意に得点が上昇したことが分かった（外部進学生を除く 273 名）。

また，４小学校別の得点の「伸び」を分析するために，2015 年度の小学校 6 年生の英検 Jr.の合計点をみると（図１），2014 年 4 月（小 5）から 2015 年 4 月（小 6）にかけて，各小学校で伸びが見られ，とりわけ旭川小学校において最も伸びが顕著であった（29.47 点から 35.39 点）。また 2015 年度においては，旭川小学校の得点が 4 校中で最も高かったことも分かる（35.39 点）。これらの結果は，旭川小学校において，週 2 時間の指導の効果があったことが推察される。

関連して，旭川中学校では 2014 年度から平均得点が上がっている。これは小学校において週２時間英語を実施していた効果と考えられる。技能別に見ると，2014 年度から語句と会話の分野で平均得点の上昇が見られる。

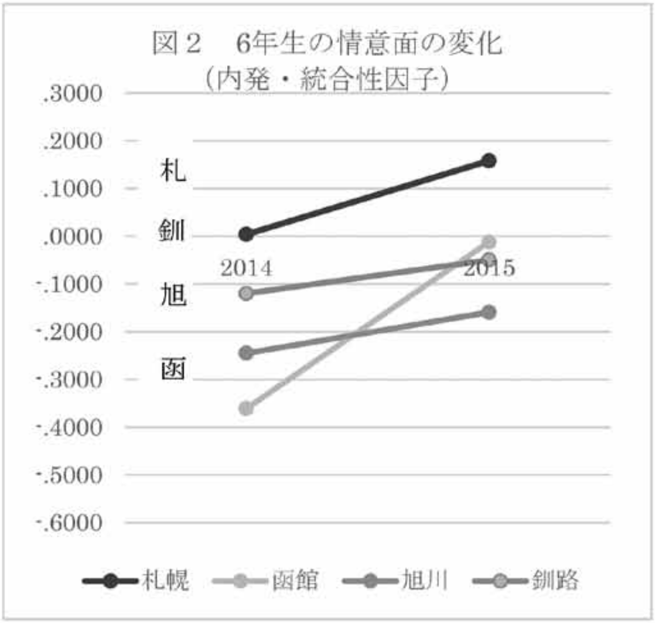
以上の結果から，小学校英語科のカリキュラムや中学校における「スパイラルタイム」の実施が，児童生徒の英語の力と動機づけの向上に関して，一定の成果につながったと考える。

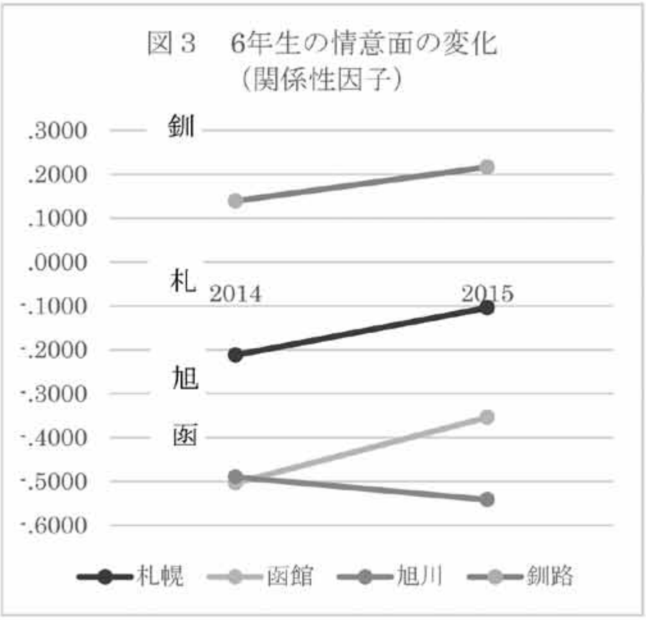
図１　２０１５年度小６の英検Jr.の合計点の推移



情意面の伸びについては，全体としては，内発性・統合性，および自律性について，いずれも有意な伸びが見られた（図２）。とりわけ 2014 年から 2015 年にかけての伸びを見て取ることができ，小学校 6 年生時の伸びがあったと判断できる。一般には 6 年生時に動機づけが低下するという指摘もあるが，本学においては，6 年生の際にむしろ動機づけが向上することが示唆された。

しかし，懸念される傾向も観察される。とりわけ週 2 時間の学習により英検 Jr.の得点が顕著に向上した旭川小学校の一部の情意因子においては，他小学校とは異なった傾向が見られる。2014 年度～2015 年度の推移において，アンケートの関係性因子（先生の教え方は自分に合っている，クラスの雰囲気はよい，楽しい）については，旭川小学校の児童のみがむしろ低下を見せている（図３）。また不安傾向を示す非 WTC 因子（友だちが英語をうまく話せたりしているのを見ると，自分には無理かなと思ってしまう。友だちの前で英語を話すのは，はずかしくて，周りの目が気になる）についても，旭川小学校において強くなっている（別紙補足資料参照）。週 2 時間の教科としての指導により，英語力および内発性・統合性・自律性などの情意面は顕著に向上するが，一部の情意面で低下する可能性が示唆される。今後，教科としての英語指導を進めてゆく上で，指導内容・方法などの面でどのような改善が可能か，検討が必要である。





②　児童生徒の動機づけや不安に関する実態調査（アンケート）結果から

札幌・函館・旭川・釧路の各小学校（４校の回答者数　計 541 名）で技能別の自信度のアンケート（自信あり 5－自信なし１）を行ったところ，以下のような結果が得られた。

【自信がある傾向】	【自信がない傾向】
１．アルファベットの大文字を書くこと。(4.45)	１．みんなの前で英語で発表すること。(2.48)
２．アルファベットの小文字を書くこと。(4.27)	２．英語で自分のことや意見を言うこと。(2.79)
３．アルファベットを読むこと。(4.06)	３．英語の文を声に出して読むこと。(3.04)
４．日本語と英語のちがいを知ること。(3.49)	４．英語の文を理解して読むこと。(3.05)
５．英語で簡単かんたんな会話をすること (3.38)	５．英語の発音を練習すること。(3.19)

自信がある上位５つの項目の中で注目されるのはアルファベットを書くことと読むことについての自信である。これまで系統的なカリキュラムを開発し，文字についても段階的な指導を進めてきた成果であると思われる。一方で，課題としては，自信がない上位５つの項目として，「みんなの前で英語で発表すること」「英語で自分のことや意見を言うこと」「英語の文を声に出して読むこと」などが並び，これらについての指導上の課題が残っていることが示唆される。とりわけ，発表に対する不安や音読への不安が見られ

るため，コミュニケーション活動に至るていねいな授業構成や不安を下げる工夫を行う必要がある。さらには文を読むことについては，段階的な読みの指導を行い，無理に読ませないなど配慮を徹底する必要がある。また音読に関しても，無理のない指導段階を組むことや，言語材料の選択など，指導の工夫を進めたい。

③　児童の振り返りカードの内容から

児童の振り返りカードを見ると，英語学習が教科として高められたことにより，難しさを感じている児童は増加したと考えられる。特に，高学年では自分の考えや情報を発信する学習が増え，そこに不安を感じている記述も見られる。しかし，同時にそうした難しさを乗り越えて表現したことについて手応えを感じている記述も多い。例えば，札幌小学校の児童の振り返りでは，以下のような記述が見られた。

- 意外と調べても出てこない単語があったからそこが一番苦戦した。でも，伝わったからそこはうれしかった。
- 英語で日本食の説明をするのに自分は何度も練習をしないとできないけど何となく言えるようになりました。もっとちゃんとたくさん言えるようになりたいです。

英語で情報を発信することの難しさを感じながらも，ある程度達成感を覚えることによって見通しをもち，学習への動機づけを高めることができる。そのためにも，指導者の方で「できるようになる」道筋を作っていくことが肝要なのだと考える。

④　パフォーマンステストを用いた英語力の診断結果から

中学校では第３学年において，各中学校で 40 名程度を抽出しスピーキングテストを実施した。問題の内容は，即興を前提にやりとりをする問題と，あるテーマについて１分間の準備時間を与えたのちまとまりのある一貫した文章で話す問題の２問である。評価の観点として，第１問では（Q1）相手の発話に対応した適切な内容のやりとりとなっているかどうか，（Q2）適切な文法や表現を用いて話しているかどうかの２つを，第２問では（Q3）与えられた質問に対応した適切な内容となっており，論理展開が分かりやすい構成になっているかどうか，（Q4）適切な文法や表現を用いて話しているかどうかの２つを設定した。

４中学校の結果を比較・分析したところ，Q1 を除いて札幌中学校の平均得点が高かった。また，各中学校とも即興的な会話においてよりも，準備して行うプレゼンテーションが内容・文法とも平均得点が低い傾向が見られた。「スパイラルタイム」において，自分の知っている表現のみを使って，相手に即興で説明することを継続的に行ってきたことが，中学校３年生で実施したスピーキングテストの結果にも成果として表れている可能性がある。伝える内容を整理し，文法的に正しい英語で話そうとするよりも，内容に関して即興で話す方が良いスコアが得られた。

⑤　CAN-DO 達成度アンケートの結果から

即興的なやりとりという点においては， CAN-DO リストでの自己評価においても，次のような効果が表れている。

札幌中学校では，７月，１０月の２回，CAN-DO リストの中間自己評価を行った。「日常生活における身近な場面で，簡単な英語を用いて自分の言いたいことを伝えることができる」，「ある話題について，自分の言いたいことを簡単な英語で話したり，質問したりすることができる」の項目において，７月に比べて 10 月のほうが生徒の自信の度合いが高まっていることが明らかになった。この結果が CS トレーニングの成果であると単純に結論づけることはできないが，学習内容が高度化していくことに対して自信の度合いが下がることなく，この活動を含めた日常の取組が Speaking の即興的なやりとりに対する自己肯定感を高めていると考える。

２　教師への効果

本研究開発を実施するに当たり，特に小学校では多くの先生が英語科の授業を実践している。そこで，「教師の指導観や指導方法は変わったと思うかどうか」と「子供の姿に変容は見られるか」の２点につい

てインタビューやアンケート調査を行った。アンケートの回答内容から，英語の指導に関わる教師たちは，概ね次のようなことを考えるようになってきている。

○　積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を重要視することや，子供が主体的に学びを展開できるようにする方針は，大きく変わることではないと考えている。
○　読むことや書くことに関する指導は新たに取り入れていく必要があると感じつつも，読むことや書くことを含めて，コミュニケーションを図る必要感を生み出すための工夫を考えることは大切だと考えている。
○　視点に沿った振り返りを行わせることで，少しずつ子供が自ら学習の成果や課題を見出していくことができると考えている。

研究開発の実施により，小学校の教師が英語科の具体的な指導の在り方について考えるようになってきているのは組織としての成果である。

３　保護者等への効果

本研究開発に関しては，保護者からの不安や不満の声は特になく，好印象をもっていただいていると判断している。ただし小学校英語科の評価の在り方に関して，数値等による評価も試行し，実際にどのような影響を及ぼすのかを調べる必要があった。そこで，函館小学校において，実際に数値等による評価を実施し，それに関するアンケート調査を行った。

2015 年 10 月に函館小学校において，児童・保護者（204 世帯）から回答を得て，数値等による評価（◎○△）と記述による評価（文章）への賛成度を尋ねたところ，統計的有意差はみられなかった。しかし，成績の高い児童は低い児童よりも，数値等および記述の評価のどちらでも動機づけが高まると回答し，保護者は自分の子供の成績が高いほど記述による評価への賛成度が高かった。一方，学年による違いとしては，数値等による評価の方が動機づけが高まるとの回答には学年差があった。学年が上がるにつれて，数値等による評価で学習のやる気が出るという傾向は下がっているようにみられる。

（２）実施上の問題点と今後の課題

まず１つ目として，小学校においては，とりわけ第１学年及び第２学年の教科としての取組について，時間数を考えると英語に慣れ親しむことは可能であるが，活用を通して習得を図っていくことには不十分さを感じている。一方で，教科として英語を学習する前の慣れ親しむ時間は，英語という言語への気付きを促すうえでも必要であると考える。このことから，28 年度については，第１学年及び第２学年では「英語活動」を実施し，「小学校英語科」は第３学年から実施することとしたい。

２つ目に，「小学校卒業時の CAN-DO リスト」について，特に「話すこと」に関して，発表とやりとりのバランスに偏りが生じてしまった点が挙げられる。この点については，再考する予定である。また「小学校卒業時の CAN-DO リスト」全体についてもさらに精査を進め，一層活用できるものにしていきたい。

３つ目に，今年度の小学生に対する情意面についてのアンケートの中で，一部の項目が低下している傾向も見られたことについて，分析と対策が必要であるという点が挙げられる。例えば，「みんなの前で英語で発表すること」や「英語で自分のことや意見を言うこと」に関して，自信をもてない原因は英語だからなのか，日本語でも自信をもてずにいるのかを考察しながら，多くの児童がコミュニケーションを図るための技能を身に付け，自信をもてるようにしたい。また，音読など，読み書きに関わる不安についても再検討したい。

最後に，中学校において，「スパイラルタイム」をどのように進めていくかという点について，さらに検討を加えていきたい。特に，間違いを恐れずに英語を話し，意味のあるやりとりをする中で，自分の考えや気持ちを伝えていくためのより具体的な方策の検討を進め，どのような力が身に付いたのか，それはどのような手立てによるものだったのかを検証していくこととする。

別紙１

北海道教育大学附属札幌小学校（外　３小学校）　教育課程表（平成 27 年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	**小学校英語科**	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	**300** **(-6)**		**133** **(-3)**		**100** **(-2)**	**66** **(-2)**	**66** **(-2)**		**100** **(-2)**	34			34	**17** **(+17)**	**850** **(0)**
第2学年	**309** **(-6)**		**172** **(-3)**		**103** **(-2)**	**68** **(-2)**	**68** **(-2)**		**103** **(-2)**	35			35	**17** **(+17)**	**910** **(0)**
第3学年	**235** **(-10)**	**67** **(-3)**	**172** **(-3)**	**87** **(-3)**		**56** **(-4)**	**56** **(-4)**		**102** **(-3)**	35		**65** **(-5)**	35	**35** **(+35)**	**945** **(0)**
第4学年	**235** **(-10)**	**87** **(-3)**	**172** **(-3)**	**102** **(-3)**		**56** **(-4)**	**56** **(-4)**		**102** **(-3)**	35		**65** **(-5)**	35	**35** **(+35)**	**980** **(0)**
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	**0** **(-35)**	70	35	**35** **(+35)**	**980** **(0)**
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	**0** **(-35)**	70	35	**35** **(+35)**	**980** **(0)**
計	**1429** **(-32)**	**359** **(-6)**	**999** **(-12)**	**399** **(-6)**	**203** **(-4)**	**346** **(-12)**	**346** **(-12)**	115	**587** **(-10)**	209	**0** **(-70)**	**270** **(-10)**	209	**174** **(+174)**	**5645** **(0)**

※　新教科（小学校英語科）では，他教科で扱う内容についてその一部を扱うこととし，減時数分の内容を担うこととする。

例えば，国語で担っている話すこと・聞くことのうちのコミュニケーションの基礎，算数における数の基本や図形，時間，音楽における歌唱やリズム遊び，図画工作における造形活動，体育における身体表現，生活科における遊びや学校で働く人たち，理科における動植物の名前，社会科における地域の地名やお店の仕事などの内容である。

別紙１

北海道教育大学附属札幌中学校（外　3 中学校）　教育課程表（平成 27 年度）

	各教科の授業時数									道徳	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語				
第１学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第２学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第３学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	190	105	3045

・各学年において、外国語の時間の一部を小学校との継続的な指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定する。

別紙２

学校等の概要１

１　学校名、校長名

北海道教育大学附属札幌小学校（ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクサッポロショウガッコウ）　校長　戸田　まり

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

所在地　北海道札幌市北区あいの里５条３丁目１番１０号

電　話　０１１－７７８－０４７１　　ＦＡＸ　０１１－７７８－０６４０

３　児童数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
74	2	70	2	68	2	70	2	74	2	78	2	434	12
4		3	1	3		4	1	2		3	1	19	3

（下段は特別支援学級、２学年で１学級）

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	18	0	1	0	1	14
ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	42						

学校等の概要２

１　学校名、校長名

北海道教育大学附属旭川小学校（ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクアサヒカワショウガッコウ）　校長　岡田　みゆき

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

所在地　北海道旭川市春光４条１丁目１番１号

電　話　０１６６－５２－２３６１　　ＦＡＸ　０１６６－５２－２３６３

３　児童数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
71	2	75	2	64	2	74	2	74	2	69	2	427	12

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	1	7
ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	31						

別紙２

学校等の概要３

１　学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾククシロショウガッコウ
北海道教育大学附属釧路小学校　　校長　　村山　昌央

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

所在地　北海道釧路市桜ヶ岡７丁目１２番４８号

電　話　０１５４－９１－６３２２　　　　ＦＡＸ　０１５４－９１－６３２４

３　児童数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
56	2	62	2	65	2	67	2	65	2	76	2	391	12

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	15	0	1	0	1	5

ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	3	0	30

学校等の概要４

１　学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクハコダテショウガッコウ
北海道教育大学附属函館小学校　　校長　　新開谷　央

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

所在地　北海道函館市美原３丁目４８番６号

電　話　０１３８－４６－２２３５　　　　ＦＡＸ　０１３８－４７－７３７６

３　児童数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	71	2	66	2	68	2	71	2	79	2	425	12

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	2

ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
0	1	3	0	24

学校等の概要５

１　学校名、校長名

ﾎｯｶｲﾄﾞｳｷｮｳｲｸﾀﾞｲｶﾞｸﾌｿﾞｸｻｯﾎﾟﾛﾁｭｳｶﾞｯｺｳ
北海道教育大学附属札幌中学校　　校長　　佐藤　昌彦

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号
所在地　北海道札幌市北区あいの里５条３丁目１番１１号
電　話　０１１－７７８－０４８１　　　　ＦＡＸ　０１１－７７８－０４８３

３　生徒数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
105	3	108	3	125	3	338	9
7	1	8	1	6	1	21	3

（下段は特別支援学級、２学年で１学級）

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	19	0	2	0	0	11

ＡＬＴ	ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ	事務職員	司書	計
2	1	4	0	42

学校等の概要６

１　学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクアサヒカワチュウガッコウ
北海道教育大学附属旭川中学校　　校長　　安藤　秀俊

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号
所在地　北海道旭川市春光４条２丁目１番１号
電　話　０１６６－５３－２７５１　　　ＦＡＸ　０１６６－５３－２８６１

３　生徒数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
109	3	112	3	122	3	343	9

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	15	0	1	0	0	8

ＡＬＴ	ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ	事務職員	司書	計
1	4	3	0	35

別紙２

学校等の概要７

１　学校名、校長名

北海道教育大学附属釧路中学校（ホッカイドウキョウイクダイガクフゾククシロチュウガッコウ）　　校長　　杉山　佳彦

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

所在地　北海道釧路市桜ヶ岡７丁目１２番２号

電　話　０１５４－９１－６８５７　　　　ＦＡＸ　０１５４－９１－６８１２

３　生徒数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
100	3	95	3	102	3	297	9

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	4

ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	3	0	27

学校等の概要８

１　学校名、校長名

北海道教育大学附属函館中学校（ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクハコダテチュウガッコウ）　　校長　　羽根田　秀実

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

所在地　北海道函館市美原３丁目４８番６号

電　話　０１３８－４６－２２３３　　　ＦＡＸ　０１３８－４７－６７６９

３　生徒数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
106	3	106	3	117	3	329	9

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	15	0	1	0	0	7

ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	3	0	31

平成 27 年度

研究開発実施報告書

～第 3 年次～

北海道教育大学附属札幌小学校

外 7 校

平成２７年度研究開発学校実施報告書

Ⅰ　研究開発の概要

１　研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため，小学校に新教科を導入し，４技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法，中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

２　研究の概要

小学校第１学年から新教科「小学校英語科」を導入し，国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力と積極的な態度の育成を目指した。具体的には，

①　「小学校英語科」の情意面及び技能面での目標と評価の在り方

②　４技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムや文法指導の在り方

③　小中の教師間交流，児童生徒間交流，カリキュラム連携の在り方

を研究した。ただし，平成 25～26 年度の研究において，コミュニケーション能力の素地も養うべきであることが明らかになってきた。したがって，平成 27 年度は第１学年及び第２学年ではコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした，いわゆる「活動型」で研究実践を進めた。そして第３学年から第６学年においてはコミュニケーション能力の基礎を養うことを目標としながら，上記の研究を進めた。

中学校では，英語の時間の一部を，小学校との継続的な指導やより高度で発展的な言語活動の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し，英語科における指導計画と指導方法の見直しを研究した。

さらに，小・中学校ともに英語学習における「学びのイノベーション」を目指し，ICT 機器を利用しての個別学習，遠方の仲間や海外の子供たちとの英語を介しての協働学習や交流学習の在り方を研究するとともに，その成果を，いつでもどこからでも誰にでも利用できる蓄積発展型教材としてウェブ上でデータベース化し，その効果的活用を図るための指導方法や評価方法をあわせて開発することを目指してきた。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究の目的

国際社会において主体的に活躍するためには外国語を運用する能力が必須であるが，その根幹となるのは，異文化への関心であり，異文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲である。その意味において，小学校における現状の外国語活動は，コミュニケーション意欲の向上に大きく寄与している。一方，コミュニケーション能力の育成のためには，言語や非言語のあらゆる手段を場面や状況に応じて使い分けながら，相手の気持ちや考え，思いなどを伝え合う経験を積み重ねる必要もある。したがって，児童の発達段階に合った言語活動の場を設定し，英語の語彙・表現を活用しながら「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を養うことも不可欠である。

もちろん，外国語に初めて触れる小学生にとって，「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４技能を同時に身に付けさせることは大きな負担となる。そこで，第１学年から「小学校英語科」を導入することで，段階的・系統的に学習することができるようにと考えた。そのためのカリキュラムや指導方法，中学校との円滑な接続の在り方についての研究を進める必要がある。これが研究の第１の目的である。

次に，「小学校英語科」を導入し，培われたコミュニケーション能力の基礎を十分に生かすためには，中

学校の英語の授業はどうあるべきなのか，指導方法を含めて見直していく。これが，研究の第２の目的である。

児童生徒の外国語によるコミュニケーション能力を育成するには，小学校と中学校が指導内容の連続を図り指導方法に一貫性をもたせ，系統だったカリキュラム連携を考慮する必要がある。そのためにも，まず，指導方法や内容を共有したり，協力して指導にあたるなどの教師間交流，児童生徒の学びの様子を通じて互いの学習内容を把握したり，児童生徒の言語習得への動機付けを図るための児童生徒間交流の在り方を研究することが必要となる。これが研究の第３の目的である。

第４の目的は，児童生徒のコミュニケーション能力を高めるための指導方法の一つとしての，学びの場における ICT 活用である。様々な学校種，児童の発達段階を考慮して，一人一台の情報端末や電子黒板，無線 LAN 等が整備された環境において，デジタル教科書・教材を活用した教育の効果・影響の検証，指導方法の開発，モデル・コンテンツの開発等を行う実証的研究をしていく。

（２）研究仮説

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力は，小学校において新教科「小学校英語科」を導入するとともに，中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し，小・中学校の効果的な連携を図る中で，ICT 機器の活用や，仲間との協働学習を効果的に導入しながら，４技能を総合的に育成することで向上する。

① 小学校第 1 学年から英語の学習を導入することで，言語や文化についての体験的な理解と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を重視しながら，「読むこと」「書くこと」を含めた 4 技能を総合的に育むことにより，国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力を育成することができる。

② 小学校で培った英語によるコミュニケーション能力が中学校でも引き継がれるよう，中学校において英語の授業の一部に「スパイラルタイム」を設定し，指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成し，教師間交流，児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図ることで，生徒の英語学習へのモチベーションや目的意識が高まり，コミュニケーション能力が向上する。

③ 国際社会において主体的に活躍するために求められる，異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図る態度は，「学びのイノベーション」として ICT 機器を積極的に活用し，遠方に住む子供や異文化の子供たちとの協働学習を通じて育まれる。また，学習成果を蓄積型発展教材としてデータベース化する「わくわく！スノーマン・プロジェクト」は，子供の文字への関心を引き出すとともに，「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲につながり，他者との協働学習による学びの広がりを実感させ，英語学習の動機づけと異文化理解を促す契機となり，主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながる。

（３）研究内容

① 新教科「小学校英語科」を導入し，カリキュラム開発を行う

（ア）小学校新教科「小学校英語科」における目標と評価，カリキュラムの在り方についての研究

（イ）中学校「スパイラルタイム」における指導方法と指導内容の在り方についての研究

（ウ）小学校卒業時の CAN-DO リストの作成

② 「スノーマン・プロジェクト」を意識した授業づくり

（ア）課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり

（イ）自らの学びを確認し，他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発展教材づくり

（ウ）時間や空間を超えて相手とつながることの楽しさを実感することによる主体的態度の育成

③　英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」

（ア）空間を超えて人とつながる環境（スカイプ，E-mail，インターネット）

（イ）時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境（インターネット）

（ウ）音と文字の関連を一人でも実感できる環境（どきどき！英語変換チャレンジ）

④　効果的な小中連携の在り方

（ア）効果的な小中の情報交換の在り方

（イ）教師間交流，児童生徒間交流の在り方

（ウ）効果的な小中接続のためのカリキュラムの在り方

（４）必要となる教育課程の特例

小学校：新教科「小学校英語科」の新設

第 1 学年及び第 2 学年は週 0.5 時間，年間 17 時間設定する。各教科から時数をあてる。

第 3 学年から第 6 学年は週 1 時間，年間 35 時間設定する。

第 3 学年及び第 4 学年は各教科，総合的な学習の時間から時数をあてる。

第 5 学年及び第 6 学年は外国語活動の時間の時数をあてる。

※　ただし，検証のため旭川小学校においては，第 5 学年及び第 6 学年の時数を年間 70 時間設定する。

（５）研究成果の評価方法

①　測定方法

（ア）小学校卒業時における英検 Jr. GOLD グレードレベルの調査の実施

小学校卒業時に，「日本英語検定協会」主催の英検 Jr. GOLD グレードクラスの学力が身に付いているかどうか評価した。（研究仮説①③の測定）

（イ）中学校英語学習初期の段階における文字習得状況調査

文字を取り扱わない小学校外国語活動で学んできた生徒と「書くこと」を取り入れた小学校英語科で学んできた生徒の文字習得状況の違いを，中学校入学後 2 ヶ月を経た段階での単語テストにより調査する予定であった。（研究仮説①③の測定）

→　評価方法全体を整理し，平成 27 年度は実施しなかった。各種調査の量が多くなり，児童生徒への負担に配慮したことと，英検 Jr.を実施したことにより，文字に関する知識についてのデータが得られたためである。

（ウ）児童生徒へのアンケートによる評価

「小学校英語科」「スパイラルタイム」の学習者の心理面への効果を，コミュニケーションへの意欲や言語や文化への関心の点からアンケート調査した。（研究仮説①②③の測定）

（エ）中学校における発表力・表現力の状況調査

現行中学校英語教科書には，「発表しよう」「紹介しよう」「スピーチしよう」などの，英語によるプレゼンテーションを扱った題材が多く見られる。英語によるプレゼンテーション活動の状況を通じて，発表姿勢や意欲，使用される表現において，どのような力が付いているかを調査した。（研究仮説①②③の測定）

②　見取りの方法

（ア）振り返りカードによる評価

授業終了時には，児童生徒一人一人に対して「振り返りカード」を記入させる。これは学習活動における気付きを児童生徒自身が記入するものである。小学校 1 年から中学校 3 年生まで継続的

に記録して，変化の様子や学習の深まりを比較している。　　　　（研究仮説①②の見取り）

（イ）ポートフォリオとしてのピクトフォリオによる評価

児童生徒一人一人がそれぞれのピクトフォリオを作成し，デジタルコンテンツ化して，ウェッブ上にアップロードする。アップロードの際，教師がこのピクトフォリオを事前にチェックして，児童生徒の英語力の向上を調査している。　　　　（研究仮説③の見取り）

（ウ）アンケートによる評価

発達段階に応じて「英語への関心・意欲」についてのアンケートを行い，児童生徒の興味・関心のポイントを検証し，授業内容の改善に役立てている。　　　　（研究仮説①②③の見取り）

③　プロジェクトの評価

（ア）北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクトによる検討（内部評価）

振り返りカードやアンケート，各種調査による検討を行い，授業の方向性や改善点を検討した。また，本学大学教員による児童・生徒の英語力の分析，教師による授業分析を行い，授業改善に生かしていくことを継続中である。

（イ）北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクト評価委員会による検討（外部評価）

評価委員会（文部科学省，北海道教育委員会，札幌市教育委員会関係者で構成予定）を立ち上げ，本研究に対して評価していただき，プロジェクト全体の改善に生かす場をもった。

Ⅱ　研究開発の経緯

1　研究開発の経過

年　次	研究推進内容
＜第一年次＞	(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回） (2)　新教科「小学校英語科」の教育課程上の位置付けの検討 (3)　新教科「小学校英語科」の目標設定とカリキュラム作成 (4)　新教科「小学校英語科」評価の在り方の検討と CAN-DO リストの作成 (5)　新教科「小学校英語科」を導入後の中学校英語の目標と指導計画の見直し (6)　児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施 (7)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流・教師間交流の開始 (8)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」プレ運用開始 (9)　「どきどき！英語変換チャレンジ」実施 (10)　「スパイラルタイム」のカリキュラム開発 (11)　文字習得状況調査（中学１年・５月）の実施 (12)　評価委員会による評価の実施と次年度の方向性の検討 (13)　中学校・高等学校間の効果的な連携の在り方について検討
＜第二年次＞	(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回） (2)　小学校第１学年からの「小学校英語科」の実施 (3)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (4)　附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年４回） (5)　1 年次研究成果の評価／中学校英語の目標再設定 (6)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」の本格実施 (7)　「どきどき！英語変換チャレンジ」の継続 (8)　「スパイラルタイム」の実践 (9)　文字習得状況調査（中学１年・５月）の実施 (10)　児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (11)　評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第三年次＞	**(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回）** **(2)　CAN-DO リストによる評価の一部実施と見直し** **(3)　小学生が習得する基礎的文法事項の習得状況調査と効果の測定** **(4)　中間評価（成果の確認と修正）** **(5)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動** **(6)　附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年４回）** **(7)　接続を意識した小学校と中学校のカリキュラムの見直し**

	(8)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」継続 (9)　「どきどき！英語変換チャレンジ」継続 (10)　「スパイラルタイム」の実践継続 (11)　児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (12)　評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第四年次＞	(1)　北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年４回） (2)　附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (3)　附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年４回） (4)　「わくわく！スノーマン・プロジェクト」完成 (5)　研究の成果と効果の検証

２　評価に関する取組

年　次	評価推進内容
＜第一年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　児童英検を用いた英語の理解力診断（2 月　小学校 6 年生） (3)　学力テストを用いた英語力の診断（8 月　中学校 1 年生） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
＜第二年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　児童英検を用いた英語の理解力診断（2 月　小学校 5・6 年生） (3)　パフォーマンステストを用いた英語力の診断（3 月　中学校 1・2 年生） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
＜第三年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　英検 Jr.等を用いた英語の理解力診断（2 月　小学校 5・6 年生） (3)　パフォーマンステストを用いた英語力の診断（8 月　中学校） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
＜第四年次＞	(1)　児童生徒の実態調査（4 月，2 月　小学校 6 年生及び中学 1 年生） (2)　英検 Jr.等を用いた英語の理解力診断（2 月　小学校 5・6 年生） (3)　パフォーマンステストを用いた英語力の診断（8 月　中学校） (4)　振り返りカードによる情意面の見取り（6 月～） (5)　上記　(1)～(4)の評価をもとにした 4 年間の成果の検証（11 月）

Ⅲ　研究開発の内容

１　教育課程の内容等

（１）小学校英語科の目標

【第１学年及び第２学年】

英語を通じて，言語や文化について体感的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。

【第３学年及び第４学年】

英語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現を身に付けさせながら，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

【第５学年及び第６学年】

英語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，身に付けた表現を活用させながら，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

（２）平成 27 年度に設定した各学年の目標，内容，内容の取扱い

前記の各学年の目標を踏まえ，次のように領域別に四つに分けて具体的な目標及び内容を設定する。

【第１学年・第２学年】

１　目標

Ａ　聞くこと

英語を聞くことに慣れ親しみ，身近なもの・ことを表す英語の意味を理解しようとする態度を養う。

Ｂ　話すこと

英語を言うことに慣れ親しみ，身近なもの・ことを英語で言おうとする態度を養う。

Ｃ　読むこと　・　Ｄ　書くこと

アルファベットへの興味・関心を高めることができるようにする。

なお，身近なもの・ことを表す英語とは，次に示すような範囲の英語を指す。

色，数，動物，野菜，食べ物，乗り物，形などの身近なものの名前，あいさつや動作を表す英語など。

２　内容

Ａ　聞くこと

・　アルファベットや身近なもの・ことを表す英語を繰り返し聞くこと。
・　アルファベットや身近なもの・ことを表す英語を聞いて，その意味を理解すること。
・　意味を予想しながら，最後まできくこと。

Ｂ　話すこと

・　アルファベットや身近なもの・ことを表す英語をリズムに合わせて唱えたり，歌ったりすること。
・　アルファベットや身近なもの・ことを表す英語を言うこと。
・　相手に聞こえる声の大きさで話すこと。

Ｃ　読むこと　・　Ｄ　書くこと

・　アルファベットを見ながら，アルファベットの歌を聞いたり歌ったりすること。
・　アルファベットを見ながら，アルファベットを用いたゲームなどをして文字に慣れること。

３　内容の取扱い

（１）英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう，次の事項について指導するものとする。

・　英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
・　聞くことを重視し，次第に言う，話す段階を大切にすること。

（２）日本と外国の言語や文化について，体感的に理解を深めることができるよう，次の事項について指導する。

・　身体表現や動作を伴った活動を通して，英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との共通点や相違点を感じ取り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
・　日本と外国との生活，習慣，行事などの違いに気付くこと。

【第３学年・第４学年】

１　目標

Ａ　聞くこと

簡単な英語を聞いて，話し手の好みなどを理解できるようにする。

Ｂ　話すこと

簡単な英語を用いて，自分の好みなどを話すことができるようにする。

C　読むこと

アルファベットを読むことができるようにするとともに，身近なもの・ことを表す英語を理解し，声に出して読むことができるようにする。

D　書くこと

アルファベットを正しく書き，身近なもの・ことを表す英語を見ながら書き写すことができるようにする。

なお，簡単な英語とは，次に示すような範囲の英語を指す。

身近なもの・ことを表す英語に加え，自分の気持ちや考えを伝え合うための英語など。

2　内容

A　聞くこと

・　簡単な英語を強勢，イントネーションなどに注意して聞くこと。
・　簡単な英語を聞いて，その意味の大体を理解すること。
・　話す相手を見て，反応しながら聞くこと。

B　話すこと

・　英語特有の音やリズム，イントネーションをそっくりに真似て言うこと。
・　自分の名前や好みの紹介に必要となる簡単な英語を用いて話すこと。
・　相手の方を見て，反応を確かめながら話すこと。

C　読むこと

・　アルファベットの大文字及び小文字を読むこと。
・　身近なもの・ことを表す英語を用いたゲームなどをして，文字を読むことに慣れること。

D　書くこと

・　アルファベットの大文字及び小文字を正しく書き分けること。
・　身近なもの・ことを表す英語を用いたゲームなどをして，英語を見ながら書き写すことに慣れること。

3　内容の取扱い

（1）英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう，次の事項について指導するものとする。

・　英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
・　積極的に英語を聞いたり，話したり，読んだり，書き写したりすること。
・　言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。
・　聞くことを重視し，次第に言う，話す段階を大切にすること。
・　十分に聞いたり，話したりした内容について，読んだり，書き写したりすることを大切にすること。
・　知っている言葉を活用して，言い換えることを大切にすること。

（2）日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深めることができるよう，次の事項について指導する。

・　英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
・　音声と文字の関係について，活動を通して気付くことができるようにすること。
・　日本と外国との生活，習慣，行事などの違いを知り，多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。

・　発達段階に応じ，異なる文化をもつ人々との交流等を体験し，文化等に対する理解を深めること。

【第５学年・第６学年】

１　目標

A　聞くこと

・　初歩的な英語を聞いて，話し手の意向の大体を理解できるようにする。

B　話すこと

・　初歩的な英語を用いて，自分の思いや考え，事実などを話すことができるようにする。

C　読むこと

・　簡単な英語（単語・文）の意味が分かり，声に出して読むことができるようにする。

D　書くこと

・　簡単な英語を見ながら書き写すことができるようにする。

なお，初歩的な英語とは，次に示すような範囲の英語を指す。

簡単な英語に加え，事実や意図を伝え合ったり，相手との関係を円滑にしたり，相手の行動を促したりするための英語など。

２　内容

A　聞くこと

・　初歩的な英語を強勢，イントネーションなどに注意して聞くこと。

・　初歩的な英語を聞いて，その意味の大体を理解すること。

・　話し手が伝えたいことを理解するまで，聞き返したり，意味を確認したりしながら聞くこと。

B　話すこと

・　基本的な英語の音声の特徴をとらえて，正しく発音すること。

・　自分の考えや気持ち，事実などを簡単な英語で話すこと。

・　伝えたいことを伝えるために，言い換えやジェスチャーなどを使って工夫しながら話すこと。

C　読むこと

・　簡単な英語で表される意味の大体を理解すること。

・　易しい絵本や身近なもの・ことを表す単語や文を声に出して読むこと。

D　書くこと

・　簡単な英語を見ながら書き写すこと。

３　内容の取扱い

（１）英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう，次の事項について指導するものとする。

・　英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。

・　積極的に英語を聞いたり，話したりすること。

・　言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

・　聞くことを重視し，次第に言う，話す段階を大切にすること。

・　十分に聞いたり，話したりした内容について，読んだり，書き写したりすることを大切にすること。

・　知っている言葉を活用して，言い換えることを大切にすること。

・　場面や相手，はたらきに応じて使う表現を選んだり，組み合わせたりすることを大切にすること。

（２）日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深めることができるよう，次の事項について指

導する。
- 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
- コミュニケーションを図るために必要となる文構造を理解できるようにすること。
- 音声と文字の関係について，活動を通して気付くことができるようにすること。
- 日本と外国との生活，習慣，行事などの違いを知り，多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
- 発達段階に応じ，異なる文化をもつ人々との交流等を体験し，文化等に対する理解を深めること。

（３）小学校卒業時の CAN-DO リスト　※　平成 27 年度版

	No.	CAN-DO	具体的内容
聞くこと	1	身近なことを表す簡単な英語を聞いて，意味や内容を理解することができる。	挨拶，他人の自己紹介，物の名前，数，色，気分，天気，曜日など
	2	簡単な絵本の読み聞かせを聞き，ストーリーの流れや登場人物の特徴を理解することができる。	
	3	どのように答えたらよいかを考えながら，質問を聞くことができる。	即興的なやりとりを意識して
話すこと	4	身近なことを表す言葉を英語で言うことができる。	色，形，野菜，果物，乗り物，魚，動物，昆虫，数，文房具，職業など
	5	簡単な挨拶をしたり，自分の身の回りのことについて説明したりすることができる。	時刻に合わせた挨拶，自己紹介，好き嫌い，家族，自分の街，日本食，一日の生活
	6	自分の考えや気持ち，感想などを簡単に話すことができる。	お気に入りのもの，同意したり反対したりする，行きたい国，なりたい職業など
	7	状況に合わせて自分の言いたいことを伝えたり質問したりするなど，簡単なやりとりをすることができる。	友達を遊びに誘う，ファーストフード店で注文，道案内，海外の生活時間，誕生日を尋ねるなど
読むこと	8	アルファベットを音読（発音）することができる。	フォニックスや書くことへのつながりを意識して
	9	身近な単語や文を音読（発音）することができる。	色，形，野菜，果物，乗り物，魚，動物，昆虫，食べ物，数，文房具，職業など
	10	知っている単語や文を読み，意味が分かる。	
	11	簡単な英語で書かれた物語を読み，内容の大体を理解できる。	
書くこと	12	アルファベットの大文字と小文字の違いや形に気をつけて書くことができる。	日本語や自分の名前をローマ字で書くなど
	13	自分の名前を書いたり曜日などの簡単な英語を書き写したりすることができる。	ごみカレンダーを作る，名前や好きなことを紹介するなど
	14	自分の考えや気持ちを，定型文に合わせて書くことができる。	

※　各学年の年間指導計画（単元名，単元の目標，主な活動，評価規準等について）は別冊参照。
※　平成 28 年度は，「話すこと」の CAN-DO について，発表とやりとりのバランスを再考予定である。

２　教育課程の内容は適切であったか

①　第１学年及び第２学年（低学年）の内容の適切性

低学年では，歌やゲームに重点を置いた活動を通して，アルファベットや，身近なもの・ことを表す英語の音声やリズムに慣れたり，表現するための技能を少しずつ身に付けていったりすることを目指す。したがって，身近なもの・ことを表す英語を繰り返し聞いたり話したりしながら意欲的に学ぶことができるような話題を単元として位置付け，生活経験や他教科における学習内容と関連を図った活動を様々に設定している。

１回の授業における新出単語は５～６語程度に抑え，年間 12 単元を通して 100 単語程度を学習していくようにして，児童の負担が過剰にならないよう配慮した。また，既に日本語化している単語や，日本語と英語で全く発音が異なるものを混在させ，児童の「わかる」「できそうだ」という思いを引き出していった。

例えば，２年生単元「いろいろな形」の学習では，triangle, circle といった児童にとって身近な単語と，oval, rectangle などの聞きなれない単語を合わせて 10 語程度扱った。札幌小学校の児童の場合，star, heart などの形を見て「英語でも言える。」「英語と日本語での言い方が一緒だからわかる。」と発言していた。circle, square などの単語は，聞いたことはあっても，何を表しているのか曖昧だったため，絵カードに描かれた形を見ながら認識していくことができた。また，rectangle, oval などの単語は難しく感じられたが，絵カードの形と音声を，簡単なゲーム活動の中で繰り返し聞いたり声に出させたりしていくことにより，音声と形のイメージをつなげ，発話につなげていくことができた。

以上のように，低学年の内容は一定の適切性が保たれていると考えている。

②　第３学年及び第４学年（中学年）の内容の適切性

中学年では，友達や教師とのかかわりを一層重視したコミュニケーション活動に取り組み，低学年で触れてきた身近なもの・ことを表す英語も含めて，簡単な英語を使いながら，自分の好みや思いなどを聞いたり話したりすることができるようになることを目指している。また，アルファベットを識別したり，正しく書き写したりしながら，身近なもの・ことを表す英語を読んだり書き写したりすることができるようにしていく。したがって，中学年の内容は，身近なもの・ことを表す英語も含めて，簡単な英語について聞くことを重視しつつ，徐々に話す活動を取り入れ，さらにアルファベットの大文字・小文字や，十分に聞いたり話したりして児童自身に思い入れのある状態となっている身近なもの・ことを表す英語を読んだり書き写したりする活動で構成されている。

例えば，４年生単元「どこにありますか」では，“Where is the coin?”を中心表現とし，物の置いてある場所を前置詞を使って尋ねたり答えたりする活動を行った。クイズのように友達と問題を出し合いながら，物の位置の様子と前置詞を結び付けて表現していくことができたことにより，児童は次のように学習を振り返っていた。

札幌小学校４年生児童の振り返り内容より

・　家の家具が英語で言えるとすごくうれしいです。それに棚を英語で言うのがむずかしかったです。
・　この授業を何回もやってきて「イン」「オン」「アンダー」「ビハイン」を覚えることができました。とっても楽しかったです。これからはいつ言われてもすらすらと答えられるようにがんばります。

また，「読むこと」に関わる内容に関しては，函館小学校の４年生 Lesson 3「どこにありますか」で行った宝探しの振り返り内容に成果が見られた。この宝探しでは，宝物がある場所を教える役の児童はあらかじめ情報カード（“Red treasure: It’s near Hikaru’s desk.”などの英語が書かれている）を持っており，

宝物を探している児童が尋ねてきた際には，そのカードに書かれてある英語の文を声に出して読んで聞かせることで宝物の場所を伝えていくようにした。

函館小学校４年生児童の振り返り内容より

・　「on」「in」「near」「under」という４つの単語が場所を教えてくれる。

・　＜楽しかった事＞ニヤだけではなくファーなども使いたい。＜わかった事＞ヒントをきいたりする英語はどのように言うのかわかった。サッカー用語と同じこと。

・　ヒントが１つじゃ分らなくて３つくらいなきゃいけなかったからむずかしかった。上や中や下，ちかくも言えるようになった。次は横や上へ↑，下へ↓なども勉強したい。

このように中学年の内容に関しても，児童が上のような学習の成果を見出しているため，一定の適切性が保たれていると考えている。

③　第５学年及び第６学年（高学年）の内容の適切性

高学年の内容は，初歩的な英語を聞いて話し手の意向の大体を理解したり，簡単な英語を用いて自分の思いや考え，事実などを話したりすることができるようになることを目指すものとしている。また，これまでに学習してきた身近なもの・ことを表す英語や簡単な英語を声に出して読んだり，書き写したりしながら，文字を介したコミュニケーションを図ることもできるようにする。

これらに関しては課題が見えてきた。例えば，６年生単元に「海外の人を日本食でおもてなし」がある。これは留学生等の外国人に，自分たちが知っている日常的な日本食について紹介する，つまり，特に事実に関する説明に自分の考えを加えながら発表を行う単元である。この学習では，児童は学習を次のように振り返っている。

札幌小学校６年生児童の振り返り内容より

・　今回は「もと」があったからできたけど，「もと」がなかったらできなかったから英語は難しい。

・　英語で説明するのは，話す他にも文を考えるのが大変でした。

また同単元を函館小学校６年生で実施した際も，児童は学習を次のように振り返っている。

函館小学校６年生児童の振り返り内容より

・　学習を通して，今まで習った英語は読み書きをしっかりとできるようになりました。英語をくみあわせて文をつくることもできるようになりました。実際に留学生と話したら，少し伝わったが，やっぱり何て言っているかわからず，難しかった。

・　今までは単語しかあまりでてこなかったけれど，今回は文で伝えることが少しむずかしかったです。自分の国の言葉ではないため，コミュニケーションがとりづらかったです。

児童は，なるべく簡単な英語で紹介しようと，ひな形として提示した This is ～. / It’s like ～. / It’s made of ～? / It’s a kind of ～.等の既習の文と食材を表す単語を組み合わせようとしていた点は成果といえる。しかし，実際に外国人を招いて日本食について紹介する活動を行ってみると，児童は実際に外国人と英語で話す体験をすることができたことに楽しさを覚えたものの，すぐに言葉が出て来なかったりするなど，円滑なコミュニケーションの実現の難しさを感じたり，外国人との説明内容に関するやりとりで行き詰まったりしていた。単元の内容の難しさだけでなく，伝えたい内容を整理し，まとまりのある説明を英語で行う経験の少なさも一因になってしまったとも考えられる。

これらの姿は，児童の「聞くこと」や「話すこと」に対する自信にも反映されていると考える。高学年の中で，「みんなの前で英語で発表すること」や「英語で自分のことや意見を言うこと」に対する自信がないと感じる児童が出てきているデータを得ることができた。

このように高学年の内容に関しても，上のような学習の成果が見られるため，一定の適切性が保たれていると考えている。

３　授業時間等についての工夫

①　第１学年及び第２学年の授業時間

第１学年及び第２学年では，第３学年以降で設定している年間３５時間の半分弱である年間１７時間の授業時間を設定した。およそ２週間に１回授業を行うような設定であるが，特に２時間での単元については，次の時間まで間が空きすぎるため，続けて２週間で行うこともあった。そのことで，短いスパンで内容や活動の記憶が残っているうちに，再度，単語や表現に慣れ親しむことができた。第１学年・第２学年の発達段階として，「やりたい」「言いたい」「覚えたい」という実態を考えると，より短い時間で空けずに英語に慣れ親しんでいけるようにするのが望ましいと考える。

なお，検証のために函館小学校の第１学年及び第２学年のみ，年間３５時間で実施した。児童は年間を通して英語の時間を楽しみにしており，年間３５時間で実施していることで活動時間には余裕が生まれた。そして一つ一つの活動にじっくり取り組み，活動の様子を児童一人一人の言葉でじっくり振り返ることで，学びの成果をしっかりと見出すことができた。

函館小学校２年生児童の振り返り内容より

- おすしのえいごがわかったから，外こくでもおすしをたのめるかもしれない。こんどは，がりとかおちゃとかもっとおすしにかかわるえいごをしりたくなった。(Lesson 3)
- おきゃくさんのときは，いっぱいまぐろをあつめてたのしかったです。おみせやさんのときは，たくさんおきゃくさんがきてよかったです。サーモンがとてもにんきだったです。(Lesson 3)
- わかったこと　兄と弟のえい語が同じだった。(Lesson 4)

しかし一方で，学びが深まるような活動を多様に設定する必要もあり，また年間１７時間で行っている札幌・旭川・釧路の各小学校における低学年児童の振り返り内容と比較しても，質的に大きな違いは見られなかった。現在設定している目標や指導事項と照らしても，低学年で年間３５時間という時間は多いように思える。

②　第３学年から第６学年までの授業時間

中・高学年においては，どの学年も年間３５時間で実施し，週１時間のペースで授業を行った。４５分の授業が週１回ずつ確実に設定できている点は，児童が学習の成果を見出し，英語を使ってできることが少しずつ増えていっている感触を得ているので，適切な時間設定であると判断している。ただし，単元によって配当時数の調整は必要になりそうである。難点として，週１時間のペースだと，学習で使用している英語を想起する場を確実に設けていく必要があることが挙げられる。つまり，年間を通じて英語を使う頻度の面で不安は残る。

一方で，時間数や英語を使う頻度を多くすることで良い効果が得られるのかというと，必ずしもそうではないこともわかってきた。

本研究開発においては，旭川小学校の第５学年及び第６学年のみ，平成 26 年度から週２時間（年間７０時間）の授業時間で実施しており，６年生については独自のカリキュラムを作成し取り組んでいる。また，全学年毎週木曜日に１５分間の「朝の英語」の時間を設けており，復習を中心にして継続的に学習に取り組んでいる。７０時間に加え，１５分の英語の時間を確保することで，より技能を身に付けることにつながっている。その効果を検証する中で，次のようなことが明らかになってきた。

○　児童英検・英検 Jr.の平均得点を定点観測したところ，平成 27 年度旭川小学校６年生４月において，他の３小学校よりも前年度からの伸びが顕著に見られた。

●　児童生徒の動機づけに関する実態調査を行ったところ，６年生の一年間で、関係性因子（先生の教え方は自分に合っている，クラスの雰囲気はよい，楽しい）が低下し、不安傾向を示す非 WTC 因子

（「友だちが英語をうまく話せたりしているのを見ると，自分には無理かなと思ってしまう。」「友だちの前で英語を話すのは，はずかしくて，周りの目が気になる」）が高まる傾向がみられた。

英語の技能に関しては伸びが見られ成果となったが，動機づけに関しては課題を残した。課題部分については，週２時間に合わせた内容や指導方法に起因することが見えてきたので，改善を図りたい。

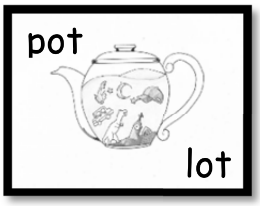
４　指導方法の適切性

（１）実施した指導方法等の特徴

①　小学校英語科における指導方法等の特徴

今年度は，昨年度充実が不十分であった点を補いながら指導方法等をさらに大枠として捉え直して実践を行った。それらの特徴を整理すると以下のようになる。

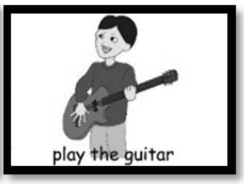
（ア）学習内容への興味・関心を高めるための工夫



昨年度，成果として見出した手立てである「学習への一層の動機づけを図る活動の設定」「ゲーム性のある各種活動の設定」「場面を重視した言語運用」「学習への一層の動機づけを図る教材の用意」に加え，次のような点に注意しながら実践した。

Ａ　特に「読むこと・書くこと」への興味・関心を高めるためのウォームアップ

・　学習の中で活用が期待される単語を使いながら，意味と音声と文字を結び付けていくための文字活動を設定した。（原則，音→ 音＋写真 → 音＋絵・写真＋文字の順に提示）

Ｂ　文字の提示の工夫

・　基本的に，話題にしているもの・ことを表す英語の音声と絵・写真等を提示し，それを経てから文字も提示する手順。

・　表示する絵を小さくし，文字を大きくすることで，意味内容を明確に文字で捉えることができるようにする試みも行った。

Ｃ　英語を読んだり書いたりする必要感のある活動・単元の創出

・　１～２か月に１冊の割合での絵本の音読の機会を設定した。（絵本を見ながらALTやJTEの後に続いて読んでいく）

※　６年生単元「The lonely monsterの友達をつくろう」において，オリジナル教材「The lonely monster」の読み聞かせ動画（文字のあるビデオ教材）を視聴し，その物語の続きを書く活動を設定した。目的意識をもった書く活動につなげていくことができた。

（イ）コミュニケーションを支える文法事項と指導の在り方

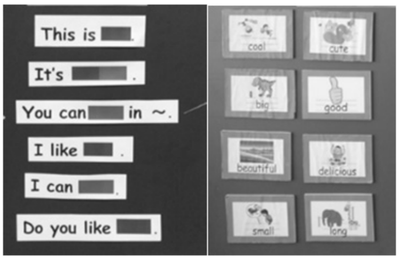
Ａ　語の変化に関する事項

函館小学校では，語の変化への気付きを促す試みを行った。例えば，加算名詞の単数形と複数形の存在に関しては，１年生の学習で使用した“Head, shoulders, knees and toes”の歌を使いながら，ボディタッチゲームを行うところから始めた。歌の内容を想起し，ボディタッチを行いながら学習内容の復習を十分に行ったところで，児童が言った“Touch your shoulder.”等の英語に合わせて教師がボディタッチを全員の前で行う場を設けた。教師がボディタッチを見せる際は，一つしかない部位や２つある部位の片方を触る場合は片手で，部位の２つとも触る場合は両手で触る。その際に，触るときの動作の違いに着目させた。さらに“Touch your shoulders.”等も取り入れながら，動作の変化に着目させ，動作の変化と言葉の変化の関係を考えさせた。その結果，児童は話合いを始め，加算名詞の単数形・複数形の存在に気付くことができた。そして，難しい言葉を使わずに「英語には，ものが２つ以上あるときに，言い方や綴りで，付け加えが必要になる言葉がある」ということを教えた。そうしたところ，「じゃあ，りんごが１つだったのが，４つに増えたら，one appleがfour applesになるの？」と発言した児童がいた。教師の様々な働きかけによ

り，英語では語の変化が起こる場合があることに気付き始めたのである。

例えばこういった指導過程を，単元の中の適切な場面に入れ込むことで，児童は円滑にコミュニケーションを図るために，活用できる知識としての文法事項と出合い，英語を繰り返し使用していく中で少しずつ身に付けていくことができると考える。

Ｂ　文中での語句の働きに関する事項



釧路小学校では，今まで学習した単語をカード化し，学びの蓄積として掲示したり，児童が思い出すために活用したりした。その際，大まかにカードを品詞によって色分けした。(名詞→青，形容詞→緑，動詞→赤など)

実際の授業場面では，既習の単語を思い出す時などに，表現の一部として空欄にする箇所を色分けすることによって，児童は自然とそこには，動詞が入る，形容詞が入ると推測するようになった。また，“What （　　） do you like?”等の文でも，（　）部分には，青のカードやさらにそれをカテゴリーとして“sports”“animals”“foods”等の言葉が入ることも推測することができた。

（ウ）方略的能力を育成するための指導の工夫

函館小学校では，６年生単元「海外の人を日本食でおもてなし」において，日本食について説明する際，はっきりと話すことや，紹介するものの写真を提示し，説明に合わせて指をさしながら話すこと等，積極的にコミュニケーションを図る姿につながる効果的な話し方に着目する場を設けた。

また，札幌小学校では，６学年単元「行ってみたい外国は？」において，相手の話に相づちを打つ際にどのような言葉を使うと自然なコミュニケーションが成立するかということを考える学習を行った。

（エ）コミュニケーション活動につながる必要感に応じた練習の機会の充実化

釧路小学校において，自分の課題をもち解決していくために，わからないところや不安なところを個人で学習できるようにICTの活用を試みた。iPad用のアプリである“Quizlet”や“Key note”を活用したり個人でビデオ教材を見たりできるようにすることで，身に付けたい表現を繰り返し学習することができた。

また，学習形態の工夫も重要である。ペア学習，グループ学習など段階的に設定し，協力して学習していける過程を大切にした。また，内容も少しずつ変化させること，難易度を変えること，制約を加えることなど，楽しみながらかつ自己の課題解決に向けて繰り返し練習する機会の充実を図る必要がある。

②　中学校「スパイラルタイム」における指導方法等の特徴

中学校では現行の教育課程の枠内で，英語の授業の一部を「スパイラルタイム」と設定し，小学校英語と指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成し，実践を進めている。この「スパイラルタイム」では，通常の授業以上に意味内容を意識して，生徒が英語をツールとして使用することを目標としている。教科書の題材や学習内容をベースに，それまで学んできた語彙や表現，背景知識を活用しながら，自分の思いを伝えたり，相手の考えを受け入れたりしながら活動する時間である。この時，生徒が小学校で学んだ内容を想起しながら，スパイラルに繰り返し学び直すことにより，英語力が向上することがこれまでの実践から見えてきている。また，教師間交流や児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図る時間としても設定でき，生徒の英語学習へのモチベーションや目的意識を高めることにも有効である。「スパイラルタイム」を通して，生徒がこれまで身に付けた知識を活用しながら，最終的には教科書の内容にとらわれず，自由に，かつ即興的に他者とコミュニケーション活動を行う姿を目指している。

今年度までの指導方法等の特徴については，以下の通りである。

（ア）小学校英語科のカリキュラムに基づき，学習内容の継続性を考慮しながら，オリエンテーションとしての活動を，中学校１年生の最初の６～８時間を使って行う。

（イ）日常生活における意味中心のやりとりによるコミュニケーション活動や，コミュニケーション・ストラテジーの育成を狙った帯的な活動を，概ね 10 分以内と位置付けて実践する。

（ウ）中学校卒業段階で，生徒が討論やディベートなどのより高度なコミュニケーション活動ができるようになるための，学習内容の広がりや，生徒の思考の深まり，表現の技能や質の高まりを目指した発展的な活動について，単元の終末に２～４時間程度の発展的な活動を位置付ける。

（エ）英語での自己紹介活動を小学生と交流したり，ビデオレターを作成したりするなど，他地域の中学生や異年齢集団，異文化をもつ人々と ICT 等も活用しながら音声を中心として交流する活動を，各学年で３～４時間取り入れる。

③　英語学習における「学びのイノベーション」の活用

（ア）わくわくスノーマン・プロジェクト

それぞれの授業で慣れ親しみ，身に付けた単語や表現をピクトフォリオにして交流することに引き続き取り組んでいる。今年度は，写真を活用することに取り組んだ。第５学年の「自分の町を紹介しながら附属小の人と交流しよう」では，それぞれの町の特産物や景勝地の写真を使い，その下に絵やコメントも書き込んだ。例えば，“polar bear” を紹介する際に，“very cute” “Kushiro Zoo”などの英語を書き足していく姿がみられた。これらを Web 上に掲載することを通して，他校との交流や次年度での学習に使うなど，活用の幅が広がっていくと考える。

また，５年生単元「自分の日課について見直そう」においては，旭川小学校の児童が，一日の日課を表すピクトフォリオを作成し，授業の中で活用するとともに，ウェブ上にアップした。旭川小学校の児童が作成したピクトフォリオがイタリアの授業でも活用され，日本とイタリアでの生活時間を見て，比較級を使いながら比べる授業を実践したとのことであった。

（イ）どきどき変換チャレンジ

今年度も継続して実施している。ICT を活用した音声認識は，Siri との対話型コミュニケーションという形がより動機づけを高めると同時に，必然性を生む。ただし，生徒にとっては，自分の英語が Siri ではなかなか認識しない場合もあり，発音を矯正する練習としての側面が主になってしまうと心理的にも負荷がかかってしまうため，扱いについては検討が必要である。

（ウ）遠隔地にいる友達との交流学習

異なる文化をもつ人々との交流は，それ単独でも十分にコミュニケーションを図ろうとする必要感を生み出す。児童は高学年ともなると，自分たちが住む地域のことはかなり詳しくなる。一方で，遠く離れた地域のことは意外と知らないものである。今年度は，児童が ICT 機器を活用しながら興味・関心をもって取り組める学習として，５年生単元「自分の町を紹介しながら附属小の人と交流しよう」の実践において，釧路小学校５年生と函館小学校５年生との間で交流学習を行った。この交流の手段として用いたのが，iPad 用の動画通信アプリである“FaceTime”である。これはインターネットを利用したテレビ電話のようなもので，遠隔地にいる友達とのリアルタイムでのコミュニケーションを可能にした。文化が異なる遠隔地の友達と ICT 機器を介して直接コミュニケーションを図れる内容の楽しさが得られるよう単元を設計したが，児童がしっかりとコミュニケーションを図るための技能を身に付け，達成感も得られるよう指導事項を充実させた。その結果，児童は次のような成果を見出している。

釧路小学校５年生児童の振り返り内容より

・　しっかり函館小学校の人たちと交流できたし，言ってみたいと思ったし，使える英語が増え，また

できることが広がりつつあると思いました。・　函館小学校のみなさんに，花時計，夕日のことを教えて，うまく伝わらなかったところは，ジェスチャーなどをうまく使ってできました。函館の良いことを知り，行ってみたいと思ったし，自分なりに表情を工夫したりして楽しくできました。Interesting!!

函館小学校５年生児童の振り返り内容より

・　前までは，英語の読み書きが全然できなかったが，釧路の交流を通して少し会話ができるようになったし，書くこともできるようになったので嬉しく，はつおんやテンポもわかった。

・　楽しかったこと…釧路小学校の人たちと交流できたこと。わかったこと…交流する時は相手の反応も見ながら進めるのも大切。できるようになったこと…交流する時の説明の仕方，英語文などを各，伝えるなどができた。

これらの成果に基づく実践を重ねることで，児童の変容が期待できると考える。

（２）指導方法等は適切であったか

①　小学校英語科における指導方法等に関して

児童の英語の技能は全般的に伸びており，英語の学習への動機づけや自信に関しても全般的には高まりが見られた。

コミュニケーションを支える文法事項と指導の在り方に関しては，釧路小学校において，品詞によって単語カードを大まかに色分けして提示・蓄積していったことにより，“What　(　　)　do you like?”などの文が登場したときには，(　) の部分には，“sports” “animals” “foods”などのカテゴリーを表す名詞が入ることも推測することができた。このように，指導方法は基本的には適切であったと考える。しかし，すべての品詞に関して色分けを適用しているわけではなく，品詞だけでは例えば big animals といった形容詞＋名詞から成るような句の存在（sweet potato や green pepper 等は低学年から触れている名詞句である）に対応しにくい。小学校での英語の学習で品詞よりも重要なのは，むしろ文中における特定の位置に，特定の働きをする語句が入る点であることも明らかになってきた。例えば，英語の文で，多くの場合，主部（主語）の次に述部が入る。述部は多くの場合，動詞（句）から始まる。そして動詞（句）の後には，目的語が続く場合もあれば，補語や修飾語（句）が続くこともある。平成 28 年度は，英語を使わせていく中で意図的にこのような文の形と出合わせ，既習の文の形と比較したり共通点を見出したりすることができるよう，文の中での働きに応じて色分けする方法も試みる。

英語の「みんなの前で英語で発表すること」や「英語で自分のことや意見を言うこと」に関しては，自信をもてずにいる児童もいることが，児童生徒の動機づけや不安に関する実態調査（アンケート）から明らかになった。これらの点が表出したのが６年生単元「海外の人を日本食でおもてなし」と考えている。この単元においては「難しかった」と感じた児童が多くいた。内容自体の難しさもあったが，それに合った指導方法も必要であったと考える。この単元で見ていくと，「学習内容への興味・関心を高めるための工夫」は十分であったが，「コミュニケーションを支える文法事項と指導の在り方」「方略的能力を育成するための指導の工夫」「コミュニケーション活動につながる必要感に応じた練習の機会の充実化」に関して単元設計の段階で複合的に捉え直して，指導事項として盛り込む必要があった。

②　中学校「スパイラルタイム」における指導方法等に関して

（ア）オリエンテーションとしての活動

小学校英語科の学習内容を引き継いで，中学校の外国語科の授業では「聞くこと」「話すこと」から導入する活動や授業のあり方を意識する必要がある。そこで，小学校卒業時の CAN-DO リストに基づいて，聞いたり話したりする活動を中学校１年生の最初の数時間に位置付けた。また，小学校 1 年生から英語に親

しんでいる附属小出身の生徒と，公立小出身の生徒との英語の力の差を極力縮めるための時間としての役割も担っている。

札幌中学校では，自己紹介活動を題材の一つとして実施した。外国語活動や小学校英語科で既に習った一人称を用いているが,「学級の仲間との共通点を知る」という目的のもと学習活動を展開した。初めに自分の思考を広げるメモ等を活用し，それを基に英語で自分の紹介を行うことで，相手と自分の共通の趣味や特技を見つけることができ, やりとりとしての会話能力の向上とともに, 授業開きにおいて特に重要な,学級での支持的風土の醸成に寄与することができた。

このように，小学校で学習した内容について CAN-DO リストを基にしながら実践を進めたところ，４月当初の６～８時間程度を必要とした。また，CAN-DO の項目をすべて「できるようになった」ことを確認するには，それらの内容についてさらにスパイラルに学んでいく必要があり，最終的には夏季休業前までに，ほとんどの項目で生徒が自信をもってできるようになった。

（イ）帯的な活動

コミュニケーション・ストラテジーを身に付けさせる場として，授業の冒頭で「CS（Communication Strategy）トレーニング」を継続的に行っている。この活動の目的は，自分の知っている表現のみを使って，相手に即興で説明するという点にある。自分が伝えたい語彙が想起できないときや相手が理解できないときに，それに代わる語彙を使って表現する能力を高めることで，コミュニケーション能力の向上と語彙の定着を図ることができる。

釧路中学校では，毎時間の授業の冒頭 5～10 分程度を使い，初出の写真や絵を題材に日常生活の話題について話す活動を取り入れたり，教科書の内容に関連したことについて尋ねたり答えたりする活動をプレタスクとして実施したりするなどして，背景知識を活性化させる取組を行った。例えば,「ALT に日本の料理についてどのように説明すればよいだろうか」などといった学習課題に対して，生徒自身が課題意識をもつために，授業の冒頭に「CS トレーニング」の中で日本料理を紹介させる。その上で，伝える相手を明確にすることで，学習課題を自分のこととしてより主体的にとらえることができていた。

また，即興で話す活動を適宜取り入れるだけでなく，そこで表現した英文を書くことで，より適切な英文を仲間とともに考えたり, 英英辞典の表現と比較したりするなど, 書く活動へ発展させることもできた。

（ウ）発展的な活動

小学校英語科からの円滑な接続を踏まえて，中学校外国語科においては，聞いたり話したりして得た情報等について，自分の考えや意見を述べたり書いたりすること，さらにやりとりを行って会話を継続したり感想を書いたりするなど，４技能を統合した言語活動を展開することが求められる。とりわけ，中学校卒業段階でより高度なコミュニケーション能力をはぐくむために，各学年の単元の終末にどのようなタスクを位置付けることができるかを CAN-DO リストを基にしながら考え，実践した。

函館中学校では，単元の終末に２～４時間程度の発展的な活動を位置付け，学習した内容の成果を映像記録として残す活動を取り入れ，学校内 LAN 環境を活用して，生徒が互いに鑑賞できる取組を行った。買い物の場面で売り手と買い手に分かれたロールプレイを本格的に制作したり，地元を紹介したりするＣＭ制作を行ったりするなど，それまで学びを総動員して主体的に取り組んでいた。

このように，それぞれの学校の地域性や実態に応じて，オリエンテーションや帯的な活動を踏まえて内容を重視した活動を取り入れることで，生徒が見通しをもって学ぶ姿が多く見られた。

（エ）異年齢集団や異文化をもつ人との交流における活用

昨年度まで，ICT 機器を利用して，他の中学校の生徒と英語で交流したり，小学生へのビデオレターを

作成したりするなどの活動を行ってきた。今年度は，例えば，同じ中学校の中でも違う学年の生徒と英語でのやりとりをしたり，実際に海外の人たちと英語で質問したり答えたりするなど，これまでの学びを活用して交流する活動に取り組んだ。

旭川中学校では，平成 27 年 10 月に台北市立大学の学生との交流を行い，日本で人気となっているマンガやアニメのキャラクターについて説明したり，カルガリー大学からの留学生に旭川のよさや観光スポットを伝えたりする活動を行った。実際に英語で伝える相手がいることで，必要感をもって活動に取り組む様子が見られた。

③　英語学習における「学びのイノベーション」の活用に関して

「わくわくスノーマン・プロジェクト」の実践においては，成果物の共有や，それらから自分たちの文化と比較をする機会を得ることができた。また，「遠隔地にいる友達との交流学習」では，インターネットとアプリを有効活用し，遠隔地の友達と直接コミュニケーションを図る機会を得ることができた。「学びのイノベーション」は効果的に活用できているといえる。

Ⅳ　実施の効果

１　児童・生徒への効果

本研究開発を行うにあたり，北海道教育大学と附属学校が連携できる強みを生かし，各種データの収集・分析については大学の協力を得た。各種データを基に実施の効果を述べる。

（１）英検 Jr.等を用いた英語の理解力診断結果から

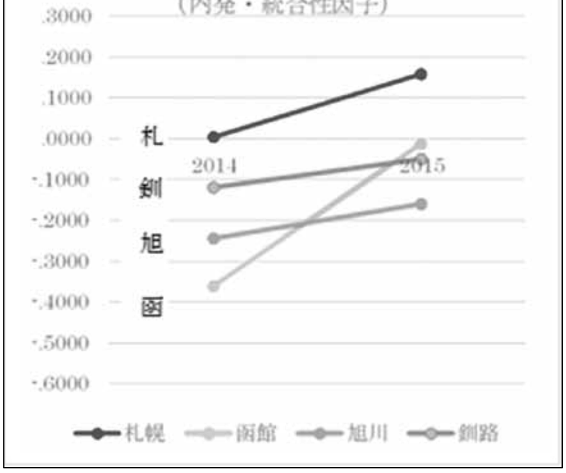
2013 年度からこれまでの児童英検 GOLD・英検 Jr. GOLD の結果を使って，定点観測を行ったところ，次のようなことがわかった。

まずは全体の英語力の伸びを推定するために, 現中学 1 年生のこれまでの英検 Jr.（GOLD）の合計点の推移を分析したところ, 2014 年 4 月（小 6）の 32.79 点から, 2015 年 4 月（中 1）の 36.04 点へと伸びを見せており，小学校 6 年生の 1 年間において有意に得点が上昇したことが分かった（外部進学生を除く 273 名）。

また，4 小学校別の得点の「伸び」を分析するために, 2015 年度の小学校 6 年生の英検 Jr.の合計点をみると（図１），2014 年 4 月（小 5）から 2015 年 4 月（小 6）にかけて，各小学校で伸びが見られ，とりわけ旭川小学校において最も伸びが顕著であった（29.47 点から 35.39 点)。また 2015 年度においては, 旭川小学校の得点が 4 校中で最も高かったことも分かる（35.39 点)。これらの結果は, 旭川小学校において，週 2 時間の指導の効果があったことが推察される。関連して，旭川中学校では 2014 年度から平均得点が上がっている。これは小学校において週 2 時間英語を実施していた効果と考えられる。技能別に見ると，2014 年度から語句と会話の分野で平均得点の上昇が見られる。

図１　２０１５年度小６の英検Jr.の合計点の推移

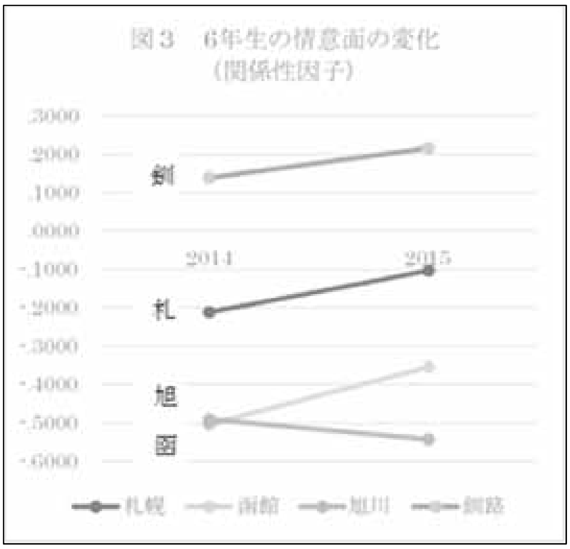
図２　6年生の情意面の変化（内発・統合性因子）



以上の結果から，小学校英語科のカリキュラムや中学校における「スパイラルタイム」の実施が，児童生徒の英語の力と動機づけの向上に関して，一定の成果

につながったと考える。

情意面の伸びについては，全体としては，内発性・統合性，および自律性について，いずれも有意な伸びが見られた（図２）。とりわけ 2014 年から 2015 年にかけての伸びを見て取ることができ，小学校 6 年生時の伸びがあったと判断できる。一般には 6 年生時に動機づけが低下するという指摘もあるが，本学においては，6 年生の際にむしろ動機づけが向上することが示唆された。



しかし，懸念される傾向も観察される。とりわけ週 2 時間の学習により英検 Jr.の得点が顕著に向上した旭川小学校の一部の情意因子においては，他小学校とは異なった傾向が見られる。2014 年度～2015 年度の推移において，アンケートの関係性因子（先生の教え方は自分に合っている，クラスの雰囲気はよい，楽しい）については，旭川小学校の児童のみがむしろ低下を見せている（図３）。また不安傾向を示す非 WTC 因子（友だちが英語をうまく話せたりしているのを見ると，自分には無理かなと思ってしまう。友だちの前で英語を話すのは，はずかしくて，周りの目が気になる）についても，旭川小学校において強くなっている（別紙補足資料参照）。週 2 時間の教科としての指導により，英語力および内発性・統合性・自律性などの情意面は顕著に向上するが，一部の情意面で低下する可能性が示唆される。今後，教科としての英語指導を進めてゆく上で，指導内容・方法などの面でどのような改善が可能か，検討が必要である。

（２）児童生徒の動機づけや不安に関する実態調査（アンケート）結果と振り返りカードの内容から

①　児童生徒の動機づけや不安に関する実態調査（アンケート）結果から

札幌・函館・旭川・釧路の各小学校（４校の回答者数　計 541 名）で技能別の自信度のアンケート（自信あり 5－自信なし１）を行ったところ，以下のような結果が得られた。

【自信がある傾向】	【自信がない傾向】
１．アルファベットの大文字を書くこと。(4.45)	１．みんなの前で英語で発表すること。(2.48)
２．アルファベットの小文字を書くこと。(4.27)	２．英語で自分のことや意見を言うこと。(2.79)
３．アルファベットを読むこと。(4.06)	３．英語の文を声に出して読むこと。(3.04)
４．日本語と英語のちがいを知ること。(3.49)	４．英語の文を理解して読むこと。(3.05)
５. 英語で簡単かんたんな会話をすること (3.38)	５．英語の発音を練習すること。(3.19)

自信がある上位５つの項目の中で注目されるのはアルファベットを書くことと読むことについての自信である。これまで系統的なカリキュラムを開発し，文字についても段階的な指導を進めてきた成果であると思われる。一方で，課題としては，自信がない上位５つの項目として，「みんなの前で英語で発表すること。」「英語で自分のことや意見を言うこと」「英語の文を声に出して読むこと。」などが並び，これらについての指導上の課題が残っていることが示唆される。とりわけ，発表に対する不安や音読への不安が見られるため，コミュニケーション活動に至るていねいな授業構成や不安を下げる工夫を行う必要がある。さらには文を読むことについては，段階的な読みの指導を行い，無理に読ませないなど配慮を徹底する必要がある。また音読に関しても，無理のない指導段階を組むことや，言語材料の選択など，指導の工夫を進めたい。

②　児童の振り返りカードの内容から

児童の振り返りカードを見ると，英語学習が教科として高められたことにより，難しさを感じている児

童は増加したと考えられる。特に，高学年では自分の考えや情報を発信する学習が増え，そこに不安を感じている記述も見られる。しかし，同時にそうした難しさを乗り越えて表現したことについて手応えを感じている記述も多い。

札幌小学校児童の振り返り内容より

- 意外と調べても出てこない単語があったからそこが一番苦戦した。でも，伝わったからそこはうれしかった。
- 英語で日本食の説明をするのに自分は何度も練習をしないとできないけど何となく言えるようになりました。もっとちゃんとたくさん言えるようになりたいです。

英語で情報を発信することの難しさを感じながらも，ある程度達成感を覚えることによって見通しをもち，学習への動機づけを高めることができる。そのためにも，指導者の方で「できるようになる」道筋を作っていくことが肝要なのだと考える。

（３）パフォーマンステストを用いた英語力の診断結果から

中学校では第３学年において，各中学校で 40 名程度を抽出しスピーキングテストを実施した。問題は，即興を前提にやりとりをする問題（第１問）と，あるテーマについて，１分間の準備時間を与えた後，まとまりのある一貫した文章で話す問題（第２問）の２種類である。

また，評価の観点として，第１問では，（Q1）相手の発話に対応した適切な内容のやりとりとなっているかどうか，（Q2）適切な文法や表現を用いて話しているかどうか，の２つを，また，第２問では，（Q3）与えられた質問に対応した適切な内容となっており，論理展開が分かりやすい構成になっているかどうか，（Q4）適切な文法や表現を用いて話しているかどうか，の２つを設定した。

４中学校の結果を比較・分析したところ，Q1 を除いて札幌中学校の平均得点が高かった。また，各中学校とも即興的な会話においてよりも，準備して行うプレゼンテーションが内容・文法とも平均得点が低い傾向が見られた。「スパイラルタイム」において，自分の知っている表現のみを使って，相手に即興で説明することを継続的に行ってきたことが，中学校３年生で実施したスピーキングテストの結果にも成果として表れている可能性がある。伝える内容を整理し，文法的に正しい英語で話そうとするよりも，内容に関して即興で話す方が良いスコアが得られた。結果として，流暢性よりも，文法的な正確性が低くなっている傾向があるといえる。

（４）CAN-DO 達成度アンケートの結果から

即興的なやりとりという点においては， CAN-DO リストでの自己評価においても，次のような効果が表れている。

札幌中学校では，７月，１０月の２回，CAN-DO リストの中間自己評価を行った。「日常生活における身近な場面で，簡単な英語を用いて自分の言いたいことを伝えることができる」，「ある話題について，自分の言いたいことを簡単な英語で話したり，質問したりすることができる」の項目において，７月に比べて 10 月のほうが生徒の自信の度合いが高まっていることが明らかになった。この結果が CS トレーニングの成果であると単純に結論づけることはできないが，学習内容が高度化していくことに対して自信の度合いが下がることなく，この活動を含めた日常の取組が Speaking の即興的なやりとりに対する自己肯定感を高めていると考える。

２　教師への効果

本研究開発を実施するにあたり，特に小学校では多くの教員が小学校英語科の授業を実践したり，意見を出し合ったりしている。そこで「教師の指導観や指導方法は変わったと思うかどうか」と「子供の姿に

変容は見られるか」の２点についてインタビューやアンケート調査を行った。

アンケートの回答内容から，概ね次のようなことを考えるようになってきている。

○　積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を重要視することや，子供が主体的に学びを展開できるようにする方針は，大きく変わることではないと考えている。

○　読むことや書くことに関する指導は新たに取り入れていく必要があると感じつつも，読むことや書くことを含めて，コミュニケーションを図る必要感を生み出すための工夫を考えることは大切だと考えている。

○　視点に沿った振り返りを行わせることで，少しずつ子供が自ら学習の成果や課題を見出していくことができると考えている。

研究開発の実施により，小学校英語科の具体的な指導の在り方について考えるようになってきているのは組織としての成果である。

３　保護者等への効果

本研究開発に関しては，保護者からの不安や不満の声は特になく，好印象をもっていると判断している。ただし小学校英語科の評価の在り方に関して，数値等による評価も試行し，実際にどのような影響を及ぼすのかを調べる必要があった。そこで平成 27 年 10 月に函館小学校において，実際に数値等による評価を実施し，それに関するアンケート調査を行った。

数値等による評価（◎○△）と記述による評価（文章）それぞれへの賛成度を尋ねたところ，児童・保護者（204 世帯）から回答を得たが，統計的有意差はみられなかった。しかし，成績の高い児童は低い児童よりも，数値等および記述の評価のどちらでも動機づけが高まると回答し，保護者は自分の子供の成績が高いほど記述による評価への賛成度が高かった。一方，学年による違いとしては，数値等による評価の方が動機づけが高まるとの回答には学年差があった。学年が上がるにつれて，数値等による評価で学習のやる気が出るという傾向は下がっている。

Ｑ１　お子様の英語学習の評価は，◎○△で通知される方法と，文章で通知される方法とでは，それぞれどのくらいよいと思いますか。１～５の数字の中から<u>１つだけ</u>選び，その数字を○で囲んでください。

	とてもよくない	よくない	ふつう	よい	とてもよい
①　◎○△による通知方法	1	2	3	4	5
②　文章による通知方法	1	2	3	4	5

Ｑ２　次の①～⑥の文を読んで，それぞれどのように思いますか。１～５の数字の中から<u>１つだけ</u>選び，その数字を○で囲んでください。

	全くそうは思わない	そうは思わない	どちらでもない	そう思う	とてもそう思う
①　◎○△による通知方法だと，お子様の学習への意欲が高まる。	1	2	3	4	5
②　◎○△による通知方法だと，現在のお子様の学習成果がわかる。	1	2	3	4	5
③　◎○△による通知方法だと，今後お子様が一層努力する必要がある点がわかる。	1	2	3	4	5
④　文章による通知方法だと，お子様の学習への意欲が高まる。	1	2	3	4	5
⑤　文章による通知方法だと，現在のお子様の学習成果がわかる。	1	2	3	4	5
⑥　文章による通知方法だと，今後お子様が一層努力する必要がある点がわかる。	1	2	3	4	5

Ⅴ　研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向

（１）これまでの取組から見られる問題点等

１つ目に，小学校第１学年及び第２学年における「教科」としての英語学習が適切かどうかという点が挙げられる。研究開発を進める過程で，この２年間でコミュニケーション能力の素地を養うことは，コミュニケーション能力の基礎を養うためには不可欠であることがわかってきた。コミュニケーションを図る楽しさをたっぷりと味わい，英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこと等は，英語の学習の動機づけになるためである。これは，コミュニケーション能力の素地を養うことは外国語活動の目標と一致するところである。現在の外国語活動が第５学年及び第６学年で実施されていることに対し，本校では第１学年及び第２学年においてコミュニケーション能力の素地を養うことが目標となるが，そのための内容は第１学年及び第２学年の児童の実態に合ったものにしなければならない。これらの点を踏まえ，平成 28 年度は第

１学年及び第２学年ではコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした「英語活動」を実施するものとし，第３学年から第６学年においてコミュニケーション能力の基礎を養うことを目標とした「小学校英語科」を実施することとしたい。これに伴い，目標についても改善を図っていきたい。

①　英語活動の目標

【第１学年及び第２学年】

英語を通じて，言語や文化について体感的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。

②　小学校英語科の目標

【第３学年から第６学年】

英語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現を活用していく中で身に付けさせながら，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

なお，平成 28 年度は，第１学年及び第２学年において「英語活動」を実施するため，必要となる教育課程の特例は次のようになる。

小学校：「英語活動」

第 1 学年及び第 2 学年は週 0.5 時間，年間 17 時間設定する。各教科から時数をあてる。

小学校：「小学校英語科」

第 3 学年から第 6 学年は週 1 時間，年間 35 時間設定する。

・第 3 学年及び第 4 学年は各教科，総合的な学習の時間から時数をあてる。

・第 5 学年及び第 6 学年は外国語活動の時間の時数をあてる。

※　ただし，検証のため旭川小学校においては，第 5 学年及び第 6 学年の時数を年間 70 時間設定する。

２つ目に，「小学校卒業時の CAN-DO リスト」について，特に「話すこと」に関して，発表とやりとりのバランスに偏りが生じてしまった点が挙げられる。この点については，再考する予定である。また「小学校卒業時の CAN-DO リスト」全体についてもさらに精査を進め，一層活用できるものにしていきたい。

３つ目に，今年度の小学生に対する情意面についてのアンケートの中で，一部の項目が低下している傾向も見られたことについて，分析と対策が必要であるという点が挙げられる。例えば，「みんなの前で英語で発表すること」や「英語で自分のことや意見を言うこと」に関して，自信をもてない原因は英語だからなのか，日本語でも自信をもてずにいるのかを考察しながら，多くの児童がコミュニケーションを図るための技能を身に付け，自信をもてるようにしたい。また，音読など，読み書きに関わる不安についても再検討したい。

最後に，中学校において，「スパイラルタイム」をどのように進めていくかという点について，さらに検討を加えていきたい。特に，間違いを恐れずに英語を話し，意味のあるやりとりをする中で，自分の考えや気持ちを伝えていくためのより具体的な方策の検討を進め，どのような力が身に付いたのか，それはどのような手立てによるものだったのかを検証していくこととする。

（２）外部評価委員からの意見等

◎平成２８年２月１２日（金）　北海道教育大学附属函館小学校

◎外部評価委員：酒井英樹教授（信州大学），田中君枝主査（北海道教育庁渡島教育局義務教育指導班），
関根昌彦指導主事（札幌市教育委員会），中村邦彦校長（札幌市立明園中学校）

①　小学校第１学年及び第２学年に関して

・　１７時間の隔週の時間数では，触れる活動は可能だが系統的に積み重ねることが難しいという意味はわかるが、例えば１年生から週２時間だと，触れる活動は必要なのか。そのあたりを整理していくといいのではないか。

・　低学年を活動型として実施する場合の名称について，「英語活動」は誤解を生む可能性がある。総合的な学習の時間の中で英語を扱う時間を「英語活動」と表す場合が多いので，「英語活動」と表すのがよいのか，他の表し方がよいのか名称は検討すべきである。

・　コミュニケーション能力の素地を養うという段階は，まだ未分化で母国語もままならない段階，外国語という言葉への気付きが段階である。そのレベルでよいのではないか。

②　児童への効果に関して

・　調査によると，全体の能力は上がっており、特に小学校英語科を週２時間で実施している旭川小学校ではその上がり方は顕著である。また，情意面では，内発・統合性は上がっているが，学級の雰囲気はよいかでは下がっている。アルファベットの項目は上がっているが，発表の部分や自信があるかという部分では下がっている。どのような点で改善していけるか？

・　英語の力や情意面の変化は，全体で見ると同時に，個人でも見ていく必要がある。その子なりの認知スタイルがある。下げた子はどういう子でどういう傾向があるのか。逆に上がった子はどういう子でどういう傾向をもっているのかも探っていく必要がある。

・　英検 Jr.は、「聞くこと」「話すこと」が中心のものである。「読むこと」「書くこと」に対しても情意的なアンケートだけではなく，技能を測るものも必要になってくるのではないか。また，個人を具体的に追ってみて傾向を把握する必要もあるのではないか。

・　自信がある児童の数値を比べることもよいが，どんな傾向の児童がどの程度いるのか測ってみるとよい。例えば，アルファベットを見ないで書ける児童が何パーセントいるのか等でも測ることができるのではないか。

・　動機づけのアンケートを見ると，今までの傾向からの変化が見られる。小学校で外国語活動を経験した生徒は英語で話すことを嫌がらない（書くことはできないが）というメリットがあったはず。今回のアンケートでは，話すことや発表についての項目が下がってきている様子が見られる。カリキュラムの難しさなのか，練習の機会の確保が必要なのか検討を重ね，みんなの前で自信をもって発表できるようにしていくべきであると考える。中学校では大きな変化はなく，小学校での変化が中心である。

・　全国の調査では，英語が好きと答えた児童が 76.2 パーセント。長野県では 86 パーセントのデータがある。そのようなデータと比較して，継続してデータを取り続けて分析をしていってほしい。

・　自信については，中学校の様子と似ている傾向がある。「英語を理解し読むこと」と言われると、その幅が広がっているなかで，何を学習していくべきか。自信のない傾向がある項目を焦点化して，指導を工夫していかなければならない。

・　6 年生の技能の時間が増えていくが、そうすると技能差が生じてくる。その中で技能だけに着目しない学習を位置付けていく必要がある。公立校へ成果を還元していくと考えたときに，もし意欲が下がった場合，このような指導をすると意欲が上がっていったという報告があるとよい。

③　パフォーマンステストとスパイラルタイムに関して

・　パフォーマンステストにおいて，１分間で考えて話をするテストを行う場合，論理構成も未熟で文法的にも正確さがなく，流暢さも低いといった段階であると，とてもハードな課題となる。それをさせようと思うのであれば，考えて話す練習をする必要がある。スパイラルタイムの中で，1 分間で考えて話をする経験をさせていく必要がある。

・　より正しく発話をするよりも，より複雑な文をチャレンジして使うことを促してほしいと思っている。

適切な文法を使っているかより，様々な表現を使って表現しようとしているか。今まで習ってきたものをそこで応用しようとしているか。そこには当然間違いも出てくる可能性もあるが，複雑なものにトライしようとすればするほど，習得状況が変わっていく可能性がある。正しい，自分の知っている表現しか使わない生徒になってしまい，新しいものを取り入れない生徒になっていくと捉えることもできる。簡単な英語で間違いを怖れて使っていく生徒を育てたいのか。それとも間違いを怖れずに様々な表現を使って，次から次へとチャレンジして自分のものとしようとしていく生徒を育てたいのか。できれば後者の方を狙っていけるとよいと考える。

・　評価規準について，「適切な」という表現が「文法」にかかっている。学習指導要領や解説編の中では，「適切に伝える」「正しく伝える」ということであり，「正しい文法で伝える」ということではない。つまり，「情報が正しく伝わる」のが一義的。さらに文法も正しければ，確実にその目標を達成できるという考え方があると思うので，適切な内容なのか，正しい文法なのか，両者なのか，それを明確に分けて考えていく必要がある。今回の中３の英語力調査でも，むしろ答える側ではなくて，質問する側，話かける側をテストしたと聞いている。つまり生徒はいつも質問されて答える側という立場が多いと思うが，そうではなくて，ALT と二人きりの場面で自分から話しかけなければ会話が始まらないといった，「自分から話し始める」といったことを大切にすると，文部科学省の狙っている即興性にもつながっていくのではないかと思う。

・　小学校で使った表現が，中学校ではなかなか出てこないということがある。例えば I want to be ～. という不定詞を使った表現は，小学校 6 年生で扱った後は中学校２年生まで出てこない。覚えていないかもしれないが，「そういった表現をどんどん使わせていこう」「文法事項や教科書の単元の順番にとらわれずに自由に使ってよい時間として設定していこう」というのがスパイラルタイムのよいところでもある。よってオリエンテーションの時間や帯の時間として設定していった経緯がある。活用しながら習得すること，まさにやりとり中心の時間である。即興性が上がっているのは，そのこともあるのではないか。時数が変わっていないので，正確性が下がるのは仕方ない。逆に流暢性や即興性が上がっていることに自信をもって取り組んでいけばよいのではないか。

④　小学校における CAN-DO や評価について

・　パフォーマンステストを小学校でどう取り入れていくかついては，全国的にも注目されていることである。来年度の計画を考えると，まずはカリキュラムの修正，次に CAN-DO を用いて評価をどうするか，それをどう測っていくか（面接なのかペーパーなのかパフォーマンスなのか）。

・　全体の活動の中で見取ることもあるし、個別にパフォーマンステストを行うこともあると思う。実際には，授業の中で個人的に呼んで見取る，一単位時間で見る人数を絞って見取る，数時間にわたって見取るということが現実的である。

・　数値ではなく、◎○△の三段階評価をつけていくことがやりやすい。

・　他県での研究では，「何分以内で何語読める」といった明確な基準をもっている CAN-DO もある。誰でも活用できる CAN-DO リストになるよう参考にしてほしい。

・　CAN-DO リストが２年次と３年次と改善が図られている。最終年度に向けて，評価について CAN-DO との関連を明らかにしてほしい。

⑤　その他

・　これからの英語教育では，英語を繰り返し使えるようにしていく必要がある。再度 CAN-DO を見通した上でカリキュラムの整理をしてほしい。

・　アクティブ・ラーニングは英語の学びとどう合致していくか。思考・判断・表現を大事にしている学校だからこそ，アクティブ・ラーニングとの関連を踏まえた提言もしていってほしい。

平成 27 年度

研究開発実施報告書
１～６年生のカリキュラム及び
ウォームアップカリキュラム

北海道教育大学附属札幌小学校
外 7 校

１年カリキュラム

○言語目標　◎コミュニケーション的目標　☆知識、理解

時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1,2月	3月
単元名	**1-1** 英語であいさつしよう	**1-2** 虹の色は何色？	**1-3** 動いちゃだめだよ	**1-4** いくつあるかな？	**1-5** 虫取りをしよう	**1-6** 顔と体	**1-7** この野菜と果物わかるかな？	**1-8** 進め！止まれ！	**1-9** クリスマス	**1-10** 動物園へ行こう	**1-11** どんな乗りもので行きますか？
時間	2	1	2	1	1	1	3	1	1	2	2
単元の目標	○英語で挨拶をする ◎友達の名前を覚え挨拶の後につけて言う ◎友達に笑顔、大きな声で挨拶をする ☆英語での挨拶を知る	○色の名前を聞いたり、言ったりする ◎虹の色の名前を言う ＊CLIL的な活動	○簡単な動作の英語を聞いたり、言ったりする ◎動作の指示を聞いてその通りの動作をしたり、止めたりする	○1～10まで数字を聞いたり、言ったりする ◎教師の質問に数字で答える	○虫の名前を聞いたり、言ったりする ◎虫の名前を言われて理解する	○体の各部の名前を聞いたり、言ったりする ◎体の一部を触れと言われて触ることができる	○野菜の名前を聞いたり、言ったりする。 ◎色や形のヒントで野菜の名前を言う	○英語を聞いて理解する。 ◎英語を聞いて理解し、その通りの動作をする	○クリスマス関連の語彙を聞いたり、言ったりする。 ☆クリスマス関連の語彙を知る	○動物園にいる動物の名前を聞いたり、言ったりする ◎クイズに答える ☆地域の動物園について知る	○乗り物の名前を聞いたり、言ったりする ◎どの乗り物が好きかと聞かれて答える ◎目的地への乗り物の手段を聞かれて答える
主な活動	歌 Hello Song 絵本　A beautiful butterfly 挨拶をする。 じゃんけんゲーム	歌 Rainbow 絵本 A beautiful butterfly 虹の色塗り	歌 Walking, Walking 絵本 Tiny Boppers ジェスチャー フリーズゲーム	歌 Seven Steps 絵本 Tiny Boppers クイズ	歌 ABC song 虫取りゲーム	歌 ABC song Head Shoulders 絵本 Teddy Bear タッチングゲーム	歌 ABC song Head Shoulders The Hokey Pokey Vegetable Boy & Fruit Girl クイズ	歌 ABC song The Hokey Pokey We Wish You a Merry Christmas サークル in, out ゲーム	歌 ABC song We Wish You a Merry Christmas 絵本 Dear Santa スタンプラリー	歌 ABC song Weather song Make a circle 絵本　Dear Zoo クイズ輪投げで動物をキャッチ	歌 ABC song Weather song Make a circle 好きな乗り物調査
教師の英語	*Hi, Everyone.* *Let's play rock'n scissors.* *How're you doing?*	*What's this?* *This is a rainbow* *What color?* *How many colors?* *Let's color it ~.*	*Stand up.* *Sit down.* *Freeze*	*How many?*	*Let's catch a bee.* *flowers,* *honey* *leaves,* *What's this?*	*Touch your~.* *Draw three eyes.*	*long, small, round, big, hard, soft ,* *sweet, sour, bitter,* *vegetable,* *fruit, ,*arms, skirt, *feet, Guess what?*	*go, stop, fast, slow*	How many?	*Let's go to the zoo!* *animal*	*Who likes this one?* *big, small, How do you go there?* *What's coming?* *school, park,* *amusement park* *book store,* *department store*
児童の言語材料	Hi. Hi. rock, scissors, paper Hi, ○○. Hi, ～ 先生。 Good, thank you.	red yellow blue range green pink purple (indigo blue, black, white)	jump, swim walk run turn, fly kick	one, two, three, four, five, six, seven, eight nine, ten (eleven) (twelve)	butterfly bee beetle ladybug, grasshopper (snail) (spider) (ant) (dragonfly)	head shoulders knees toes eyes ears mouth nose,	carrot, peas, onion, tomato,　potato, pumpkin, lettuce, (cucumber, corn, eggplant) apple, banana, peach, strawberry cherry, (lemon , melon, orange, grapes,)	up, down in out	candle, candy cane ribbon, bell, star Santa Claus Christmas stockings	lion, tiger panda, monkey, polar bear, penguin, lesser panda, hippo,　zebra, elephant, giraffe, gorilla	bike bus train plane car ship truck by bus. (rocket)　(UFO)
復習					red, one ~ ten		head, shoulders, knees, toes, eyes, ears, nose, mouth		one ~ ten	mouth, run, sleep	run, fly,

２年カリキュラム

○言語目標　◎コミュニケーション的目標　☆知識、理解

時期	4月	5月	6月	7,8月	9月	10月	11,12月	1,2月	2,3月
単元名	**2-1** ジェスチャー大会	**2-2** これってどんな形？	**2-3** すし屋で注文しよう	**2-4** 家族を集めよう	**2-5** 好きなおやつをもらおう	**2-6** ハロウィーンのお面を作ろう	**2-7** 20 まで数えてみよう	**2-8** 見て！きれいだね	**2-9** 自然と、自分の町
時間	2	2	2	2	2	1	2	2	2
単元の目標	○英語の意味を理解し、動作で表現する ◎教師が言ったとおりに動作する	○形の名前を聞いたり、言ったりする ◎英語の形の名前を聞いてその形に似たものを日本語で言う ◎今まで学習したものの形を言う	○魚の名前を聞いたり、言ったりする ◎すし屋で魚の名前を言って注文する ☆魚の名前の言い方を知る	○家族の名前を聞いたり、言ったりする ◎お互いの言うことを理解する ☆家族の言い方を知る	○自分の好きなおやつを下さいと言える ○相手がほしいといったおやつを渡す ◎好きなおやつを下さいと言い、受け取ってありがとうと言う ◎相手の好きなおやつをどうぞと言って渡す	○ハロウィーン関連の語を知る ○モンスターに関連させた形容詞の意味を知る ☆ハロウィーンについて知る ＊図工と関連させる	○20 まで言う ◎友達と数字を言ってゲームをする ☆数字の言い方を英語で知る	○ある物の感想を表現するために形容詞を使う ◎ある物の感想を言いあったり、あいづちをうったりする ☆大きさ、長さ、感想等の英語を感覚で理解する	○山や川などの自然を表す語句、工場や、お寺，塔等の言い方を学ぶ ◎絵、写真などを見て、名前を言うことができる
主な活動	歌 ABC song Weather song 絵本 Animal Verbs チャンツ ジェスチャーゲーム	歌 ABC song The days of the Week クイズ 図画	歌 ABC song Ⅱ The days of the Week クイズ	歌 ABC song Ⅱ Five Little Monkeys ジェスチャーゲーム	歌 ABC song Ⅱ 絵本 Yummy and Yucky チャンツ	歌 ABC song Ⅱ Halloween 絵本 Boo Who ハロウィーンのお面を作る	歌 ABC song Ⅱ Ten Little Snowmen 絵本 Spot Can Count チャンツ 数字ビンゴ 数字早出しゲーム	歌 ABC song Ⅱ Bingo 絵本 Big and Little ジェスチャー	歌 ABC song Ⅱ Bingo 英語を聞いて絵を描く
教師	Copy me.	What's this shape? Is it ~? CD, pyramid, dice, chick	What's that? What would you like? It's under ~.	Which one is dad? Which part is Mika playing?	hot, cold sweet, bitter You're welcome.	Make a happy face. Who is he(she)?	5 plus 3 is 8. 9 minus 2 is 7.	What do you think? How about ~? This is ~. So ～. ~ and ~. They're ~.	What's this? What can you see?
児童の言語材料	eat, drink sleep wash dance bow fly kick	circle square triangle rectangle oval	fish whale octopus squid shrimp crab tuna salmon salmon roe, egg	dad mom brother sister baby grandma grandpa black I can ~. I am in ~/ I have ~ hair.	ice cream, pie, chocolate, cookies, pancake, cake, sandwich, pudding water, milk, juice yummy, yucky B, please. Here you are. Thank you.	monster jack o' lantern ghost witch happy sad funny scary (Trick or treat)	thirteen fourteen fifteen sixteen seventeen eighteen nineteen twenty	Look! Look! Beautiful! Yeah! big, little long short cute cool scary	What's this(that)? mountain river, sea island tower factory shrine building old, tall
復習	jump, swim, walk, run, turn,	butterfly face, eyes, nose, mouth, ears	fly walk	red, pink, yellow, purple, green, orange kick, jump, drink, run, turn, walk, sleep rock scissors paper		fly pumpkin happy	one ~ twelve	dog, cat, car, pumpkin bike, giraffe, fish, cucumber, penguin elephant, pencil, nose, funny, hair, hand What do you think?	fish, long, ice cream whale, big, beautiful ship, white, No. blowing water out

3年カリキュラム

＊P.F.はピクトフォリオ

機能	④あいさつ　①事実を尋ねる	④あいさつ，自己紹介する，答える	②喜び，不快，問う，答える	①事実を尋ねる，答える	②好き嫌いについて問う，答える	②好き嫌いについて問う，答える	②ある物について知っているか問う，答える	②注意を引く①事実を尋ねる，答える	②欲求，願望について問う，答える	②友人や知人に話しかける③行動方針を提案する，同意する，同意しない	①　事実情報を伝える
時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1・2月	2・3月
単元名	**3-1** 世界のあいさつ 1，2年の復習とアルファベット	**3-2** 初めまして	**3-3** 気分を伝えよう	**3-4** 算数の問題を解いてみよう	**3-5** すしは好きですか？	**3-6** どんなマグカップが好きですか？	**3-7** ヒントをもとに考えよう	**3-8** 落し物が誰のものか確かめよう	**3-9** クリスマスのプレゼントでほしいものは何ですか？	**3-10** 友達を誘おう	**3-11** 自分のことを伝えよう
時数	4時間	3時間	3時間	3時間	3時間	4時間	3時間	3時間	3時間	3時間	3時間
単元の目標	世界のあいさつを聞いたり英語であいさつしたりする活動を通して，世界には，たくさんの国と言葉があることを知り，英語であいさつをするための表現の技能を身に付け，積極的に友達とあいさつしようとする。 ・1,2 年の復習とアルファベットの練習	英語で友達とあいさつや名刺交換をする活動を通して，初対面の人と会ったときのあいさつやり取りの仕方を知り I'm ～. Nice to meet you.等の表現の技能を身に付け，積極的に友達とあいさつしようとする。	ジェスチャーや絵カード等を用いて行うゲーム等の活動を通して，How are you?に対する答え方やジェスチャーの種類は様々あることに気付き，自分の気分を表すための表現の技能を身に付け，友達同士で気分を積極的に伝え合おうとする。	英語で行うビンゴや計算問題等の活動を通して，数字を表す英語の規則性に気づき，1～100までの数字を表す英語を身に付けながら，それらを使って積極的に友達と計算問題等に取り組もうとする。	好きな食べ物や教科等を尋ね合う活動を通して，外来語と英語の音声上の類似点や相違点に気付き，好き嫌いを伝え合うための表現の技能を身に付け，積極的に友達に好きなものを伝えようとする。	友達の好きなものを聞きながらどのマグカップのことを指しているかが当てる等の活動を通して，友達の興味・関心や好みは様々であることに気付き，既習の表現を場面や文脈に合わせて選んで使いながら，積極的に友達に好きな物を伝えようとする。	ヒントを聞いて対象物を言い当てる活動を通して，近くのものを指す場合と遠くのものを指す場合の表現の違いに気付き，相手に理解してもらえるようなヒントを表すための表現の技能を身に付け，対象物について積極的に伝え合おうとする。	文房具等の持ち主を探す活動を通して，日本語と英語における文房具の言い表し方の違いに気付き，所有者かどうか尋ねたり持ち主を示したりするための表現の技能を身に付け，文房具等の持ち主を積極的に伝え合おうとする。	クリスマスプレゼントとして欲しいものを尋ね合う活動を通して，そのジャンルの中でさらに具体的に尋ねるための表現があることを知り，欲しいものを尋ね合うための表現の技能を身に付け，積極的に友達に欲しいものを伝えようとする。	友達を遊びに誘う場面をもとにしたゲームやスキットを行う活動を通して，様々な遊びを表す英語を知り，勧誘したり承諾したり断ったりするための表現の技能を身に付け,積極的に友達を遊びに誘おうとする。	英語による自己紹介を聞いたり，自己紹介をしたりする活動を通して，相手に理解してもらえるような表現を用いることや，伝える際の表情，態度等の大切さに気付き，自分のことについて伝えるための表現の技能を身に付け，積極的に英語で伝えようとする。
主な活動	・What's ~ in English を使い，1,2年の語彙を復習 ・世界の「こんにちは」を聞き比べながら，なぜ英語を学ぶのか考える活動 ・時刻に合わせた英語のあいさつをする活動 ・アルファベットを用いた各種ゲーム活動	・初対面の人と出会ったときにあいさつする場面のDVDを視聴する活動 ・友達同士で，英語で「はじめまして」のあいさつをする活動 ・名前や出身地などを英語で伝えることを加えつつ名刺交換をする活動	・あいさつの場面で気分を伝え合う場面のDVDを視聴する活動 ・気分を表すジェスチャーをする活動 ・相手の気分を聞いて，それに合った絵カードを渡す活動	・英語で出席番号が呼ばれたら座っていくゲームをする活動 ・英語で数字ビンゴやキーワードゲームをする活動 ・英語で簡単な計算問題を行う活動	・食べ物を表す英語を聞いたり，それらの中で自分の好きなものを言ったりする活動 ・友達が好きな食べ物を予想し，好きな食べ物を英語で尋ねたり答えたりする活動 ・テーマを食べ物から教科に変えて，好き嫌いを尋ね合う活動	・たくさん種類があるものの中から，好きなものを尋ね合う活動 ・好きなデザインを聞いて，どのTシャツや筆箱のことか当てる活動 ・好きな色，形，食べ物，スポーツ等を聞きながら，友達がデザインしたマグカップを当てる活動	・教室の備品等の写真を拡大したりモザイク加工したりした物を見て，それが何かを英語で言い当てる活動 ・教室の備品の近くにあるものや遠くにあるものを使って英語でビンゴをする活動 ・身近なものを使って，ブラックボックスクイズ，3ヒントクイズ等ヒントをもとに対象物を言い当てる活動	・文房具の名前を聞いたり言ったりする活動 ・文房具が相手のものかどうか尋ねる場面のDVDを視聴する活動 ・文房具の持ち主探しをする活動	・絵カードを見ながら，クリスマスプレゼントとして欲しいものを英語で言う活動 ・欲しいものを尋ね合い，プレゼント絵カードを交換する活動 ・ゲーム，マンガ，本，おもちゃ等のジャンルの中で，さらに具体的に欲しいものを尋ね合う活動	・友達を遊びに誘う場面のDVDを視聴する活動 ・友達を絵カードに描かれた遊びに誘うゲーム活動 ・グループで友達を様々な遊びに誘う場面のスキットを演じる活動	・いろいろな人の自己紹介DVDを視聴し，聞き取った名前，出身地，年齢，居住地等を聞く活動 ・視聴したDVDの内容を真似しながら有名人等になりきって自己紹介をする活動 ・自分の名前，出身地，居住地，趣味，持ち物等の内容で，英語で紹介する活動
評価規準	**関**：世界の言葉で進んであいさつしようとしている。 **技**：Good morning.等の表現の技能を身に付けている。 **知**：世界にはたくさんの国や言葉があることに気付いている。	**関**：友達とともに進んであいさつしようとしている。 **技**：Nice to meet you.等のあいさつに関する表現の技能を身に付けている。 **知**：初対面の人と会ったときのあいさつやり取りの仕方に気付いている。	**関**：自分の気分を進んで友達とともにえ合おうとしている。 **技**：I'm good. I'm great.等の気分に関する表現の技能を身に付けている。 **知**：気分を表す英語やジェスチャーは様々あることに気付いている。	**関**：数字を用いて，進んでビンゴや計算問題に取り組もうとしている。 **技**：1～100までの数字を表す英語が身に付いている。 **知**：数字を表す英語の規則性に気づいている	**関**：好きな食べ物や教科を進んで友達と伝え合おうとしている。 **技**：I like tuna. Do you like apples? 等の好き嫌いに関する表現の技能を身に付けている。 **知**：外来語と英語の音声上の類似点や相違点に気付いている。	**関**：友達に好きなものを尋ねたり，自分の好きなものを答えたりしようとしている。 **技**：What color, design do you like?等の好きなものを尋ねる表現の技能を身に付けている。 **知**：友達の興味・関心や好みは様々であることに気付いている。	**関**：様々な身近なものが，何か尋ねたり答えたりしようとしている。 **技**：What's this? What's that? 等の何かを尋ねる表現の技能を身に付けている。 **知**：近くのものを指す場合と遠くのものを指す場合の表現の違いに気付いている。	**関**：所有者かどうか尋ねる表現を用いて，文房具等の持ち主を友達とともに進んで伝え合おうとする。 **技**：Is this your ～? Yes. It's my ～.等の表現の技能を身につけている。 **知**：日本語と英語における文房具の言い表し方の違いに気付いている。	**関**：欲しいものを尋ねる表現を用いて，自分の欲しいものを友達とともに進んで伝え合おうとしている。 **技**：What do you want for Christmas? I want ～.等の欲しい物を尋ねる表現の技能を身に付けている。 **知**：具体的に尋ねるための表現があることに気付いている。	**関**：勧誘したり承諾したりする表現を用いて，進んで友達を遊びに誘おうとする。 **技**：Let's ～. Sure.等の勧誘や承諾をする表現の技能を身に付けている。 **知**：遊びを表す日本語と英語の違いに気付いている。	**関**：自分のことを進んで友達に伝えようとする。 **技**：I 'm from ～. I live in ～.等の自己紹介に関する表現の技能を身に付けている。 **知**：自分のことを伝える際の表情，態度等の大切さに気付いている。
言語材料	What's ~in English? Good morning. Good-bye. Good night.	I'm ～. Nice to meet you. Nice to meet you, too. I'm from Japan.	I'm good. I'm great. I'm sleepy. I'm tired. I'm hot. I'm hungry. Oh, really. food, pillow, chair, handkerchief ice, blanket, smile	one ～one hundred Twenty plus three is twenty-two. Thirty plus five is thirty-five.	I like tuna. I don't like salmon. Which ～ do you like? Do you like apples? Yes, I do. No I don't. spaghetti, pizza, curry, omelet, chicken, steak, math, English, music, Japanese, P.E., science, social studies	What color (shape, animal, sport, letter) do you like? I like blue. I like triangles. I like soccer. I like apples.	What's this? What's that? What's this in English? clock, microscope, ice pack, blanket, blackboard, chair, desk, mirror, magnet	Excuse me. Is this your ～? Yes. It's my mine. Thank you. You're welcome. No. It's ~'s. pencil, eraser, ruler, notebook, glue	What do you want for Christmas? I want ～. What ～ do you want? game, toy, comic book, dress, skis, skates, snowboard	Hi. Let's ～. Sure. No....sorry. play tag, play catch(baseball, tennis, dodge ball) have a snowball fight, make a snowman	I'm ～. I'm from ～. I live in ～. I like ～. I have ～. student
既習			Hello, how are you?	one ～ twenty	tuna, salmon, octopus, squid, egg, salmon roe,	vegetable, subject, animal, food, sport, shape に関する語彙	animal, food 関連に関する語彙		animal, food 関連に関する語彙		
方略的能力			応答表現		教科導入を連想クイズで行う		スリーヒントクイズで言い換えの基礎を養う				
絵本	Today is Monday			Spot Can Count					Dear Santa	Let's play	Me Myself
P.F.						○	○		○		○

4年カリキュラム

＊P.F.はピクトフォリオ

機能	①事実を尋ねる，答える，報告する　②興味を表現する	①事実に関する情報を問う，答える	①事実を尋ねる，答える	①事実を尋ねる，答える，報告する③行動方針を提案する，同意する③誰かに何かをするように要求する　②感謝表明，答える	②欲求問う，答える。①事実情報伝え，答える　②感謝表明，答える②あいさつ⑥話の確認を求める	②あることを行うことができるか、できないかを問う，答える	②友人や知人に話しかける②快不快を問う，答える。③助けを要請する，②元気づける	①事実報告，尋ねる，答える　②興味を表現	①事実を尋ねる，答える，報告する②あることを行うことができる、できない、を問う，答える
時期	4月	5月	6月	7月	8.9月	10月	11月	1・2月	2・3月
単元名	**4-1** 友達や家族を紹介しよう	**4-2** ペットを飼っていますか	**4-3** どこにありますか	**4-4** 学校の中を案内しよう	**4-5** 注文しよう	**4-6** これってできる?	**4-7** どうしたんですか？	**4-8** コンビニの数を調べてみよう	**4-9** 復習をしよう アフレコスキット
時数	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	3時間
単元の目標	英語を使って友達を紹介したり，写真や絵を使って家族や親せきの職業を言いながら紹介したりする活動を通して，男性や女性を表す英語の違いを理解し，積極的に友達に紹介しようとする。	ペットや家族・親せき等について紹介し合う活動を通して，ペットや家族を表す言葉の違いに気付き，飼っているかどうか尋ねたり，ペットについての自分の考えを伝えたりするための表現の技能を身に付け，自分のペットや家族・親せき等を積極的に友達に紹介しようとする。	物が置いてある場所を尋ねたり答えたりする活動を通して，英語と日本語では物が置いてある場所の表し方に違いがあることに気付き，物が置いてある場所を尋ねたり答えたりする表現の技能を身に付け，物がどこにあるか積極的に伝えようとする。	学校の中を案内する活動を通して，各教室の表し方の違いに気付き，案内をするときに使う簡単な表現の技能を身に付け，積極的に学校案内をしようとする。	買い物をする活動を通して，円とドルの違いに気付き，買い物をするときに使う表現の技能を身に付け，友達と積極的に買い物に関するやり取りをしようとする。	自分の得意技を披露しながら友達にできるかどうかたずねる活動を通して，言語や人に違いがあることに気付き，できること，できないことを伝える表現の技能を身に付け，積極的に友達にできることを伝えようとする。	相手の様子を尋ねる活動を通して，ジェスチャーの有用性に気付き，相手を気遣う言葉や自分の体調不良を伝える表現の技能を身に付け，積極的に自分の体調を伝えようとする。	学校の周りにある，施設の数を，他地区と比較する活動を通して，施設を表す英語の違いに気付き，それらの表現の技能を身に付け，積極的に説明したり，感想を言ったりしようとする。	既習事項を用いて学校や家庭生活の中でよく見られる場面に，英語を言ってあてはめる活動を通して，日本語と英語の違いに気付き，既習事項を定着させ，友達と積極的にコミュニケーションを図ろうとする。
主な活動	・クラスの友達を紹介する活動 ・絵や写真を使って家族や親せきを紹介する活動	・ペットとして飼われている動物の語彙を身に付ける活動 ・ペットを飼っているかどうか尋ねる表現を身に付ける活動 ・兄弟，姉妹，いとこがいるかどうか伝え合う活動	・物が置いてある場所の表し方を知る活動 ・物が置いてある場所を尋ねる活動 ・物が置いてある場所を答える活動 ・部屋においてあるものの場所をたずねたり、答えたりする活動	・各教室の表し方を学ぶ活動 ・学校の中を案内する表現を学ぶ活動 ・外国の人に自分の小学校を案内する活動 ・外国の小学校を案内される活動 ・学校の中を案内し合う活動	・おもちゃのドル紙幣を用いて，日本の円との違いについて学ぶ活動 ・ペアで買い物をする活動 ・ファストフードで買い物をする活動 ・飲み物，食べ物のサイズを注文する活動 ・食べ物や飲み物を持ち帰る活動	・自分の得意技を披露しながら友達にできるかどうかを尋ねたり，友達に聞かれて答えたりする活動 ・自分ができることを伝えながら，交流する活動 ・英語を聞いて、文字カードをとる活動 ・ジェスチャーの意味と文字を結びつける活動	・体調を表す語彙を知る活動 ・ジェスチャーゲーム ・スキットを作る活動 ・相手を気遣う言葉掛けを知る活動 ・相手の体調を気遣ったり，自分の体調不良を伝えたりする活動	・施設の表し方を学ぶ活動 ・施設の数を調べる活動 ・調べたことを発表する活動	・既習事項を使って，場面を演じる活動 ・学校でよく見られる場面，家庭生活や友達との関係でよく見られる場面を視聴し，どんな表現が使われているかを考えたり，絵や動画に合わせたりして言う活動
評価規準	**関**：自分の友達，家族，親せきを進んで友達に紹介しようとしている。 **技**：This is my friend ～.等の表現を身に付けている。簡単な職業を英語で言える。 **知**：He, She の使い方の違いに気付いている 。	**関**：ペットや兄弟姉妹，いとこに関する語彙や表現を用いて，友達とともに進んで伝え合おうとしている。 **技**：Do you have any pets? Yes, I do. I have a dog. No, I don't. I want a dog.等の表現の技能を身に付けている。 **知**：ペットや家族・親せき等を表すための表現の違いや共通点に気付いている。	**関**：物が置いてある場所を尋ねたり答えたりしようとしている。 **技**：Where is the ～? In the ～.等の物が置いてある場所に関する表現の技能を身に付けている。 **知**：英語と日本語では物が置いてある場所の表し方に語順の違いがあることに気付いている。	**関**：学校の中を案内する表現を用いて，友達とともに進んで楽しく伝え合おうとしている。 **技**：Where is the science room? Turn right.等の学校の中を案内する表現の技能を身に付けている。 **知**：各教室の表し方の違いについて考えることを通して，外国との文化の違いに気付いている。	**関**：買い物に関する表現を用いて，友達とともに進んで楽しく伝え合おうとしている。 **技**：For here or to go？～ dollars 等の買い物に関する表現の技能を身に付けている。 **知**：円とドルの違いについて考えることを通して，日本と外国との文化の違いに気付いている。	**関**：友達に得意技ができることを尋ねたり，自分のできることやできないことを答えたりしようとしている。 **技**：Can you do that? Yes, I can. No, I can't.等の表現の技能を身に付けている。 **知**：言語や人に違いがあることに気付いている。	**関**：相手の様子を気遣う表現や自分の体調を伝える表現を用いて，進んで伝え合おうとしている。 **技**：What's wrong? My knee hurts .等の表現を身に付けている。 **知**：ジェスチャーの有用性に気付いている。	**関**：調べたことを進んで伝えようとしている。 **技**：police box, hospital 等の施設に関する表現の技能を身に付けている。 **知**：施設を表す英語の違いに気付いている。	**関**：既習事項を用いて，友達とともに進んで楽しく伝え合おうとしている。 **技**：Can you play ～? I can ～. Where is the ～ ? It's on the ～.等の既習事項を身に付けている。 **知**：日本語と英語の違いに気付いている。
言語材料	This is my classmate, Ken. Who is this? This is my sister, Mai. This is my brother, Ken. 職業（student, teacher, doctor, office worker） He is a student. He is nice.等	Do you have any pets? Yes, I do. No, I don't. Do you want any pets? I want a dog. He / She is smart (my best friend). How about you? Sounds nice. turtle, hamster, crayfish, killifish, bird, gold fish,等	Where is ～? It's on the ～. It's in the ～. It's under the ～. Where's my / your ～? Sorry? desk, chair, bed, window, curtain, key, purse, picture, ball 等	Where is ～? , It's on the first / second / third floor. Let's go together. Sure. This way please. Here it is.　teacher's room, music room,　gym, science room, bathroom, library,　English room playground principal's office	Hello? ～, please. Short or tall? Tall, please. For here or to go? To go, please. Here you are.　～ dollars hamburger, French fries, pancakes, salad, pie, soup, cola, tea, pasta, pizza, curry, doughnut 等	I can cook (curry). Can you do that? Yes, I can. / No, I can't. Oh really.　Oh, can you? Sounds nice.　Cool. play baseball / soccer / tennis play the piano / guitar	Hi. What's wrong? I have a cold (fever, toothache) My toes (feet, knees) hurt. Help me.　medicine, ice, Take care. How are you? Are you OK?	sea, mountain, river, island, factory, shrine, temple, building, castle, police box, hospital, store, flower shop, post office, department store, restaurant, school, park, Kita ward has 12. So many!	Where is the ～? It's on the ～. Do you have any ～? Yes, ～. No, ～. Who is this ～?
既習	family　関連語彙	family　関連語彙，動物関連，cool, cute, sweet, nice, tall	文房具関連の語彙その他	教科	Thank you. , one, two , three , four , five … twenty	動作関連の語彙	Body parts 関連語彙	自然，施設，建物，その他を表す語彙	
方略的能力		応答表現		学校の施設をスリーヒントクイズで当て、言い換えの基礎を養う		応答表現	応答表現	難しい表現の言い換え　単語	
絵本	Pal the Parrot		Where's Spot?			From Head to Toe			
P.F.	○	○		○		○			

5年カリキュラム

＊P.F.はピクトフォリオ

機能	①事実を質問し，答える	①事実報告，質問，答える	②事実尋ねる，答える	①事実報告，その他	②興味を表現　⑤誰かの意見を尋ねる	①事実報告，尋ねる，答える　②興味を表現 ⑤例示する	④あいさつ　①事実報告，質問，答える	④あいさつ　④注意を引く　①②⑤⑥	②謝罪，謝罪受け入れ ③何かをするように要求 ②感謝
時期	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11・12月	1・2月	2・3月
単元名	**5-1** 今何しているの	**5-2** 自分の日課を他の人と比較してみよう	**5-3** 運動会はいつですか	**5-4** 五感をもとに表現しよう	**5-5** 様子を伝えよう	**5-6** Show and Tell(お気に入りのものを紹介しよう)	**5-7** 自分の町を紹介しながら，附属小の友達と交流しよう	**5-8** 附属小以外の人とお話をしよう	**5-9** 場面を考えよう CS　スキット
時数	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	5時間	3時間	3時間
単元の目標	第三者がしていることを尋ね合う活動を通して，動きを表す言葉の変化の仕方に気付き，していることを尋ねたり答えたりする表現の技能を身に付け，積極的に伝え合おうとする。	日本や海外にいる友達の一日の生活時間を尋ね合う活動を通して，世界には時差があり，それぞれの生活時間や習慣が違うことに気付き，時刻を尋ねたり，答えたりする表現の技能を身に付け，自分の生活について積極的に伝え合おうとする。	誕生日や行事等を伝え合う活動を通して，世界と日本の祭りや行事等の違いに気付き，月日に関する表現の技能を身に付け，互いの思いを確認しながら積極的に月日を伝え合おうとする。	対象物を伝え合う活動を通して，日本語と英語の違いに気付き，五感を使って感じたことを表現する技能を身に付け，感受性豊かに積極的に表現しようとする。	人の性格や様子を伝え合う活動を通して，性格や様子を表す言葉の違いに気付き，性格や様子を表す言い方，それに同意したり，反対したりする表現の技能を身に付け，積極的に自分の考えを伝え合おうとする。	自分のお気に入りのものを紹介する活動を通して，日本語と英語の違いに気付き，自分の考えや気持ち等を表す表現の技能を身に付け，積極的に話したり，反応したりしようとする。	自分の町のよいところを（ほかの3校の）附属小の友達に紹介する活動を通して，他の町のよさに気付き，伝えたいことを言葉や文字を使って表現する技能を身に付け，積極的に自分の町を紹介しようとする。	既習事項を用いて，初めて合う人に自分のことなどを紹介したり，相手に質問したりする活動を通して，既習事項を活用する技能を身に付け，積極的に自分のことを伝えようとする。	定型の表現を場面に合わせて考える活動を通して，同じ表現が異なる状況で使用されるときの感情表現の違いに気づく。
主な活動	・動きを表す言葉を知る活動 ・していることを尋ねる表現を学ぶ活動 ・していることを答える表現を学ぶ活動 ・○時に友達から電話が着たと仮定して，何をしているのか答える活動 ・○時に友達と電話をして，していることを尋ね合う活動	・ALTの日本や外国での生活時間を聞く活動 ・友達の一日の生活時間を尋ねたり，答えたりする活動 ・世界には時差があり，それぞれの生活時間や習慣が違うことに気付く活動	・誕生日や行事の日などの月日の言い方や尋ね方を理解して，話す活動 ・世界と日本の祭りや行事の時期や季節などの違いに気付く活動	・目で見た時に感じる英語，音で聞いた感じ，感触，におい，味等を表す英語をそれぞれ使って対象物を表現する活動	・人の性格や様子を表す表現，それに同意したり，反対したりする表現を身に付ける活動 ・人の性格や様子を表す表現，それに同意したり，反対したりする表現を活用する活動	・自分のお気に入りのものについて，具体物を使って紹介する活動 ・Show and Tellで発表する等工夫しながら伝えようとしている姿を捉える活動	・自分の町のよいところを（ほかの）附属小の友達に紹介する活動 ・伝えたいことを物や文字等を使って伝える活動	・大学生等に自分の考えや気持ちを伝える活動 ・反応を大切に，進んで会話を続ける活動 ・簡単な英語を使って，工夫しながら話す活動	・定型の表現を実際に使う場面を想像しながら，伝え合う活動 ・今まで学習した表現を応用する活動
評価規準	**関**：していることを尋ねたり答えたりする表現を用いて，友達とともに進んで楽しく伝え合おうとしている。 **技**：What are you doing? I'm studying.等のしていることを尋ねたり答えたりする表現の技能を身に付けている。 **知**：動きを表す言葉の変化の仕方について考えることを通して，外国との文化の違いに気付いている。	**関**：動作や時刻を表す表現を用いて，自分の生活時間を進んで伝えようとしている。 **技**：　I get up at ～.等の一日の生活に関する表現の技能を身に付けている。 **知**：世界には時差があり，生活時間や習慣に違いがあることに気付いている。	**関**：月日に関する表現を用いて，特定の月日について進んで伝え合おうとしている。 **技**：When is your birthday? My birthday is ～.等の月日に関する表現の技能を身に付けている。 **知**：日本と外国の祭りや行事等の違いに気付いている。	**関**：感じたことを表す表現を用いて，自分の思いを進んで伝えようとしている。 **技**：I see ～. Looks～.等の感じたことを表す表現の技能を身に付けている。 **知**：日本語と英語の違いに気付いている。	**関**：性格や様子，同意や反対を表す表現を用いて，自分の考えを進んで伝えようとしている。 **技**：She is great. I think so too. I don't think so.等の性格や様子，同意や反対を表す表現の技能を身に付けている。 **知**：性格や様子を表す言葉の違いに気付いている。	**関**：自分の考えや気持ち等を表す表現を用いて，進んで話したり，反応したりしている。 **技**：I like ～. It's ～.等の自分の考えや気持ちを表す表現の技能を身に付けている。 **知**：日本語と英語の違いに気付いている。	**関**：言葉や文字を用いて，進んで自分の町のよさを伝えようとしている。 **技**：I live in ～.　I like ～.　This is ～.　等の表現の技能を身に付けている。 **知**：自分の町のよさや他の町との違いに気付いている。	**関**：既習事項を用いて，初対面の人に進んで自分のことを紹介したり，相手のことを質問したりしようとする。 **技**：How about you? Oh, really? Are you sure? 等の既習事項を活用している。 **知**：相手の反応を確かめながら話すことの大切さに気付いている。	**関**：よく使う表現を用いて，進んで伝え合おうとしている。 **技**：That's OK. Go ahead. 等のよく使う表現を身に付けている。 **知**：場面によって使う言葉の感情表現に違いがあることに気付いている。
言語材料	What is he / she doing?, He / she is playing soccer. eating, studying , cleaning, watching, running, walking, reading, watering 等	What time did you get up? I get up at ～. eat breakfast / lunch / dinner at ～, come to school, go home 等	January ～ December 1st ～ 31st When is your birthday? My birthday is ～. When is the sports day?等	eyes, ears, nose, hands, mouth, Smells ～. Tastes ～. beautiful, funny, noisy, quiet, sweet, bad, soft, hard, beautiful, sweet, bitter, hot, sour, spicy, It looked like ～.等	～ is great. What do you think? great, kind, smart, funny, interesting, cool, famous I think so too. I don't think so. He / She is great.等	I have ～.　This is ～. I like ～.　It's ～. It's like ～. I got it at ～. Do you know ～? Do you like ～?等	I live in ～.　I like ～. This is ～.　It's ～.等	Speak slowly, please. Sorry? One more time, please. How about you? Oh, really? Are you sure?等	What's this?　It's～. Sorry.　That's OK. Go ahead.　Thanks.等
既習	動作関連語彙	数字	序数	形容詞，食物関連その他の語彙	形容詞	形容詞その他	自然，施設関連語彙	I think so too. I don't think so.	既習の語彙，表現すべて
方略的能力				五感を利用して，物の性質を表現し，言い換える練習		言い換えにごく簡単な文を使う	言い換えにごく簡単な文を使う	応答表現	
絵本		What's the time, Mr. Wolf?		It looked like spilt milk.		Show and Tell			
P.F.		○				○	○		

6年カリキュラム

＊P.F.はピクトフォリオ

機能	④あいさつ，注意をひく，知人に話しかける①事実報告	文字による情報，伝達①事実報告，質問，尋ねる	①事実報告，尋ねる，答える⑤例示する	①事実報告，尋ねる，答える⑤例示する	文字による情報，伝達①事実報告，質問，尋ねる	②欲求，願望①事実報告	②　欲求，願望①事実報告	①事実を質問し，答える②興味を表現⑤誰かの意見を尋ねる
時期	4月	5月	6・7月	8・9月	10月	11・12月	2・3月	1月
単元名	**6-1** ごみ出しの曜日を伝えよう	**6-2** 物語を読もう	**6-3** 海外の人を日本食でおもてなし	**6-4** 日本を紹介しよう	**6-5** The Lonely Monster の友達をつくろう	**6-6** 行ってみたい外国は？	**6-7** 将来の夢	**6-8** 復習をしよう アフレコスキット
時数	5時間	3時間	5時間	5時間	5時間	5時間	5時間	2時間
単元の目標	ごみ出しのルールについて知らせる活動を通して，日本と外国でのごみ出しのルールの違いに気付き，ごみの種類，曜日や時刻を表す表現の技能を身に付け，積極的にごみ出しのルールについて知らせようとする。	“The Detective Boys”の読み聞かせを聞く活動通して，文字と音のつながりに気付き，物語の内容について英語で尋ねたり，答えたりする表現の技能を身に付け，あらすじを理解することができる。	海外の人をもてなす活動を通して，日本食は世界遺産であることやそのよさや価値に気付き，既習事項や言い換えを活用して，積極的に日本食について説明しようとする。	外国人に日本を紹介する活動を通して，日本と外国の文化や行事等の違いに気付き，既習事項や言い換えを活用して，積極的に日本について伝えようとする。	“The Lonely Monster”を読む活動を通して，登場人物の特徴に気付き，既習の表現を活用して，積極的に絵本の続きを書こうとする。	自分が行きたい国について伝え合う活動を通して，世界の様々な国の生活の様子の違いに気付き，国や地名を表す単語や，既習事項を用いて，積極的に行きたい国とその理由を伝え合おうとする。	将来の夢を伝え合う活動を通して，職業を表す言葉の違いに気付き，将来就きたい職業や就きたい理由について，職業を表す単語や，既習事項や言い換えを活用して，自分の将来の夢を積極的に伝え合おうとする。	既習事項を使って場面に適したせりふを考える活動を通して，同じ場面でも使われる言葉によって印象が変わることに気付き，既習事項や言い換えを活用しながら，積極的に表現しようとする。
主な活動	・自分の家の隣に外国の人が引っ越してきたという内容のストーリーを聞く活動 ・ごみの種類を表す英語を知る活動 ・曜日やごみの種類，時刻などの表現を身に付ける活動 ・英語版ごみ分別カレンダーを作る活動 ・カレンダーを使ってごみの分別について紹介し合う活動	・“The Detective Boys”の読み聞かせを聞く活動 ・難しい語に着目し,読みや意味を確認してから再度読み聞かせを聞く活動 ・リピートしたり,一緒に声に出したりする活動 ・物語の登場人物が誰なのかを考える活動 ・自分で物語を読む活動	・グループで,海外の人をもてなすために出す日本食を考える活動 ・一人一品考えてグループ内でバランスを考える活動 ・料理の簡単な説明，材料などを，既習事項や言い換え活用して，簡単に説明する活動	・日本の伝統的な行事,遊びなどについて説明する活動 ・それらを外国人（ALT，JICA研修生，留学生など）に簡単な英語で伝える活動 ・既習事項を活用して，どのように伝えるかを考える活動 ・実際に紹介したり，児童同士で英語の発表を聞き合い，何についての説明なのかを当てたりする活動	・“The Lonely Monster”の読み聞かせを聞く活動 ・難しい語の意味を確認する活動 ・He has ～ . He likes ～.　等の表現を身に付ける活動 ・物語の内容を，言い換えて表現する活動 ・オリジナルのモンスターを考え，物語の続きを書く活動	・様々な国名の言い方を知る活動 ・世界遺産や外国の生活の様子を知る活動 ・自分の行ってみたい国とその理由を尋ねたり，答えたりする活動 ・自分の行ってみたい国とその理由を発表する活動	・将来の夢スピーチのモデル動画を見る活動 ・様々な職業の表現を知る活動 ・様々な職業の表現を身に付ける活動 ・将来の夢や，なりたい理由について友達に尋ねたり答えたりする活動 ・自分の発表する内容を考える活動 ・将来の夢についてのスピーチを発表する活動	・これまでに学習した表現のうち,質問の形になっているものを思い出す活動 ・視覚資料を見て,何を話しているのかを想像する活動 ・資料に適したせりふをグループまたはペアで考える活動 ・順に発表し合い,それぞれの作品の意図を交流する活動
評価規準	**関**：ごみの種類，曜日や時刻を表す表現やジェスチャー等を用いて，進んでごみの分別について伝えようとしている。 **技**：Please put out～ on ～. 等の曜日とごみの種類を組み合わせた表現の技能を身に付けている。 **知**：ごみの種類の表現について，日本語との共通点や相違点から，その面白さに気付いている。	**関**：英語の文章を目で追い,進んで声に出したり,内容について英語で尋ねたり答えたりしようとする。 **技**：英語の音声を聞き，物語の内容について，尋ねたり，答えたりする表現の技能を身に付けている。 **知**：文字と音のつながりに気付いている。	**関**：既習事項を用いて，進んで日本食について説明しようとしている。 **技**：This is ～. It’s ～.等の既習事項を身に付けている。日本食を言い換えで説明できる。 **知**：日本食のよさや価値に気付いている。	**関**：既習事項を用いて，伝える相手を意識して，進んで日本の行事や遊びについて伝えようとしている。 **技**：It’s ～. It’s made of ～. It’s like ～.等の既習事項を身に付けている。日本文化などを言い換えで説明できる。 **知**：行事や遊び等，日本独特の文化や,外国との違いに気付いている。	**関**：物語の内容について進んで尋ねたり答えたり，絵本の続きを書こうとしている。 **技**：既習事項を活用して，絵本の続きを書くことができる。 **知**：絵本を通して，英語表現の特徴に気付いている。	**関**：既習事項を用いて，行ってみたい国とその理由について，進んで伝え合おうとしている。 **技**：What country do you want to go? I’d like to go to ～.等の既習事項を身に付けている。 **知**：世界の様々な国やその生活の様子の違いについて気付いている。	**関**：既習事項を用いて，将来なりたい職業や夢について,進んで尋ねたり答えたりしようとしている。 **技**：I want to be a (an)～. I’m good at ～.等の表現を言うことができる。難しい職業の名前を言い換えできる **知**：日本語と英語での職業を表す語の成り立ちを知る活動を通して，言葉の面白さに気付いている。	**関**：進んで活動に参加しようとしている。 **技**：資料の場面に適した表現を言うことができる。 **知**：友達の作品と自分の作品を比較し,印象の違いに気付いている。
言語材料	Please put out ～on ～ before ～. plastic bottles, cans, milk cartons, garbage, paper, steel, glass bottles, burnable, unburnable, recyclable	detective like~. drop (dropped) He’s gone. was wearing ～ give (gave) look like, every day tall, friend, at school	This is ～.　It’s ～. It’s like ~.　sweet, salty, hot cold, bitter,　I like it(them). Do you like it(them)? Have you ever eaten ~? soy-sauce flavored, miso-flavored salt-flavored, matcha flavored等 rice, vinegar, sugar, salt, beef, hot water, soy sauce, green tea, chicken, shrimp, pudding 等	stamp, signature, backpack, carp, dolls, heater, lantern, wet, wood, fall, spring, winter, summer, cool, warm, cold hot, toys, old Japanese art, world heritage site, children, girls, boys, men, women, It’s ～. It’s for ~.　It has ~ .It’s made of~.　It’s like (a) ~. It’s a kind of ~ .	be made of ～,　turns to ~ look ～, everything, lips, touches look like, saw, walked away froze, got angry, asked, said, One day,　A few days later Can I have some?等	I want to go to ～. Because I want to go to ～. (see, eat, buy, ride) It’s ～. Where do you want to go? The United States of America France, India, China, Italy, Brazil, Korea, Russia 等	What do you want to be? I want to be a / an ～. Because ~, Why I’m good at ～. I like ～. I want to help ～. Thank you. diplomat, engineer, scientist, nurse, pastry chef, cook baseball player, 等	What’s this(that)? It’s Do you like ~? I like ~. What ~ do you like? I like~. When is ～?　It’s ~. Who is this?　He(she) is ~. Where do you want to go? I want to go to~. What do you want to be? I want to be a ~. 等既習の表現
既習	曜日，時刻	既習の語彙	既習表現すべて，特に食物関連語彙	～ is famous for … This is like ～.	既習の語彙		家族，職業，その他の語彙	（既習の表現を児童に選択させる）
方略的能力		簡単な文を使った言い換えを読ませる学習	簡単な文を使った言い換えを考える	簡単な文を使った言い換えを考える	簡単な文で表現された言い換えを読ませる学習	応答表現	言い換えを活用して難しい職業の名前を表現する 応答表現	既習の表現の中から,資料に適したものを選択し,設定を考える
絵本	10 things I can do to help my world	The Detective Boys			The Lonely Monster		I like Me	
P.F.	○				○	○	○	

ピクトフォリオ制作に関わって

＊3～6年 の○をつけた単元の中に組み込む

機能	※設定する単元で取り扱う言語機能に準ずる
時期	※ピクトフォリオ制作を設定する単元に準ずる
単元名	※ピクトフォリオ制作を設定する単元に準ずる
時数	※年間で 1～2 時間
単元の目標	※ピクトフォリオ制作を設定する単元の目標に準ずる。
主な活動	・単元の学習内容に関わるピクトフォリオ（対象となるもの・ことを表す絵＋英単語や簡単な英語表現が A4×1 ページに表されたカード）を制作する。 ・スノーマン・プロジェクトに登録されているピクトフォリオをダウンロードして単元の学習で活用する。
評価規準	**関**：ピクトフォリオを制作しながら，自分の思いや興味・関心のあるもの・ことについて進んで絵と文字で伝えようとしている。 **技**：単元の学習内容に関するもの・ことを表す英単語や簡単な英語表現を読んだり書き写したりしている。 **知**：英単語や簡単な英語表現が表すもの・ことのイメージの多様性や英語の音声と文字の関連等に気付いている。
言語材料	当該単元で扱っている表現 絵本の表現
既習	ピクトフォリオ制作を設定するまでに実施した単元で扱ってきた表現
方略的能力	既習表現の中から，ピクトフォリオに表したいもの・ことに適したものを選択する。
絵本	※当該単元で取り扱う絵本や，必要に応じて取り入れる絵本
P.F.	※当該単元で活用が考えられる場合には，この欄に○を付けてある。

＊尚、旭川小学校では週に 70 時間英語を学習している。
そのため５年生で、他小学の５,６年生のカリキュラム、
６年生で独自のカリキュラムを実施している。

報告書参照

Warm up のカリキュラム　＊各学年 10 分ほど取り、学年に応じていろいろな活動を積み重ね、第２のカリキュラムとする

	あいさつ	天気	曜日	月	絵本	音	文字	数字	過去形
1年	How are you? Good, thank you and you?	天気の歌	― .	―	My Friend the Moon, Tiny Boppers, Teddy Bear, Dear Santa, Dear Zoo	Hello song Rainbow, ABC song Ⅰ Weather song,	アルファベットの歌を歌いながら音や文字になじむ（大文字）		―
2年	How are you? Good, thank you and you?	What's the weather like? It's sunny. Etc.	週の歌 What day of the week is it today?	―	Boo Who, Yummy Yucky Spot can Count	The days of the Week ABC song Ⅱ	アルファベットの歌を歌いながら音や文字になじむ（小文字）		―
3年	How're you doing? Great, All right, Not so good 等を加える	上記を練習	上記を練習	月の歌を歌う What month is it? January, etc.	Today is Monday Spot Can Count Dear Santa Let's play　Me Myself	子音を意識した歌で音と文字の関係に自然に気づく	アルファベットの文字のゲームを行いながら文字を読む練習を行う	２０～３０，３０～４０，４０～５０，５０～６０まで順番に数える練習とともに、その他の活動	―
4年	How're you doing? Good, thank you and you?	時々練習	上記を練習	What's the date today? May 1st ,etc.	Pal the Parrot Where's Spot? From Head to Toe	子音を意識した歌で音と文字の関係に自然に気づく	語頭音を意識したり、単語を塊として認識したりする練習を行う	６０～７０，７０～８０，８０～９０を順番に数える練習を行うとともに、その他の活動	―
5年	How's it going? を ALT に質問してもらう。	時々練習	時々練習	上記を練習	What's the time, Mr. Wolf? It looked like spilt milk. Show and Tell	母音をライムで練習しながら、音と文字の関係に自然に気づく	語彙、または句を認識する練習を行う	９０～１００を順番に数える練習を行うとともに、数字を個々に言う活動みんなで順に数える活動、	―
6年	いろいろな言い方を練習する。	時々練習	時々練習	上記を練習	10 things I can do to help my world The Detective Boys The Lonely Monster I like Me	上記を練習	句、または文を認識識するような練習を行う	算数文章問題 ○算数文章問題をイラスト付でやさしく出題	Did you put out the trash this morning? Did you read a book last night?
備考	いろいろな表現を学習することが大切。		２年中盤から The days of the week を歌い始めて、後半から曜日を質問する		□は２学年にわたって読む 読む練習を充分した後で、2，３人に本を１冊渡して､読んでもよい。	そらで歌える歌詞を中学年で渡しても良い。異なる歌詞を見せながら歌をうたうことで、子どもの反応を見るとおもしろい。	楽しんで歌ったり、発音したりしているうちに音と文字の関係に気づけばよいというスタンスで行う。		Did が過去のことを話題にしていると理解できる程度でよい。子どもの理解度に合わせて質問を考える。

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第５５条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指示を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容の全てが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

平成２８年３月

国立大学法人
北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

北海道教育大学附属札幌小学校
北海道教育大学附属旭川小学校
北海道教育大学附属函館小学校
北海道教育大学附属釧路小学校
北海道教育大学附属札幌中学校
北海道教育大学附属旭川中学校
北海道教育大学附属函館中学校
北海道教育大学附属釧路中学校